



求道

第六號

第三卷

(行發日一四一月每)行發日一月七年九卅治明

可認物便郵種三第 日六廿月二十年一卅治明

求道第叁卷第六號目次

求道

◎時代思潮と信仰問題

感謝

◎古聖賢◎無常の觀念◎來迎佛◎今日一日の事◎獨を慎む◎生死即涅槃

▲今日一日の格言

講話

◎相續心

聖傳

◎チャータカ釋尊傳——傳道

告白

◎はてなきみめぐみ

雜錄

◎波斯紀行

鈴木悌

歎咏

◎かくれが(長詩)

甲之

◎詩(同上)

同

◎湖(短歌)

八風

時報

◎傳道紀行

旭村生

求道學舍

第二求道會

第三求道會

八月中休講

求道

第叁卷第六號

時代思潮と信仰問題

文部大臣が劃切なる訓令を出され、恰も一般の憂へつゝあつた所に能く適中したため、一世舉て精神上の問題に注意するやうになつたは喜ばしきことである、先づ大臣が此等の思想界のことにつきて深く憂慮せらるゝ様子が其言動にあらはるゝは大に尊敬を表すべきことである、而して大臣は言はば宿題を提出したとしても言ふべき有様で、朝野の人士が今頻に其解決を試みつゝあるといふ次第である、所て未だ徹到した答案を見出さぬやうで、何んとなし、痒き所に手が届かぬやうな心持がする、勿論此の如き問題は諸方面より觀察せねばならぬ事ゆへ、何れも皆一理あること、亦各相當の救済法のあることであるが、吾人は信仰問題の立場から解決して見やうと思ふのである。

今問題となりつゝある時代思潮は、一には悲觀思想、二に

は風紀廢頽三には極端なる社會主義である、此三者は一見すれば大に趣を異にすれど吾人が信仰上の問題より見るときは思想上何れも遠くないことを發見する、要するに何れも精神上に満足することなきより來るもので之を救済するにも、之を豫防するにも積極的方法として信仰を以てするより外に道はない、近時世上に傳へらるる方法は皆消極的の姑息手段、一時的の附け元氣を鼓舞するに止るものであろう、學者達の多くは自分等が學生時代に短褐悲歌の士たりしことを物語り若くば運動を奨励して氣を外に轉ずるやうなることが唱道せらるゝやうであるが、一時的の附け元氣を出させるに過ぎない、成程短褐悲歌風の書生時代には何事も物事が粗雑で細に意を用ゐるといふ様なとはなかつた、然るに今は事が複雑になつた上に各人の理想が異つて來た、試験の方法が異りて來るだけでも之を徹すべきである、又運動を盛んにするが如き所謂健全なる精神は健全なる身體にといふ古格言の通り、所謂意氣銷沈に對する生理的療法の一たるには違ひない、併運動なるものが如何程思想上にまで効力を有するか、一時流行した運動熱の盛なりし時所謂運動家なるもの、品位につきて回想するに思半に過ぐるものがある、柔弱なる文學的出版物

を讀ませぬやうにするが如きは消極的の一方方法たるべけれど猶一層深りて考ふれば此の如き出版物の出来るのが既に思想上此の如きものが存するからであつて、之を嗜むものゝ多きも一代の思想が之に傾きつゝあるからである、見るな見せるなだけでは根本的の治療は覺束ない、況んや哲學書類を嚴禁するといふが如き愚かなることを言ふやうでは仕方がない、中には恰も反對に哲學を興へて之を救はんと考へる人もある、是亦頗る怪しきものである、忌憚なく言はしめば哲學の理窟などは毒にも藥にもなりはせぬ。

猶一言せねばならぬことは此等の時代思想なるものが何より來りたるかにつきて一考を費さねばならぬ、一般に惡し方にのみ着眼して此等青年の心中を汲み得ぬやうであるたしかに現時青年の煩悶悲觀の原因はすべての點に於て理想の高まつたのが其一である、眞面目なる氣質の青年は道德上に於ても社會上に於ても何事も正しく、一點の偽なく、人とも中心融和して交際してゆきたいといふ清淨眞實なる理想を持つて居る、而して眞面目に之を實行せんと試みるのである、しかるに實際の現實界は之を去ること遠くして強食弱肉の世界である、眞面目なるだけ夫だけ悲觀に陥らざるを得ざる有様

面のみを見て理想の高まつた點を見て居らぬために救済の策が適切でないといふことを注意したまでである、此の如きものに唯運動せよ、元氣を出せよ、は満足は出來ぬ、されど如何に高き理想があるにせよ煩悶は煩悶である、信仰の眼よりみれば小松内府の如きも安心出來なかつたのである、此の如き精神状態である青年に對して倫理教育者の現に與へつゝあるものは律法的訓誡のみで、何々せよ、何々すべからずいふに止るのである、眞面目なる青年は益々理想を高めて現實界は之に伴はず、自己も實行出來ぬこととなりたる極が死の問題にゆくやうになる、そこで宗教家は如何にして之に對する、といふに人生を愛せよといふのである、成程現代を厭うて居るのであるから、人生を愛せよといふたればよからんと考へたるなれど抑々此現代を厭ふといふは人生を愛するから起つたものであるゆへ、人生に苦みつゝあるものに人生を愛せよといふは一層油を注ぎかけるやうなものである、早分りをするやうに言へば一層此世を思ひ切れといふた方が煩悶を解く方法で宗教の要を得て居るのである、此世を思ひ切れれば死ぬることは無くなるのである、されど思ひ切れといふても一旦深く煩悶に陥りたるものは之を解脱することは出來ぬ、此

である、青年の悲觀を訓誡しつゝある人々が青年の眼より見れば彼等の理想を去る遠きことを悲みつゝあるかもしれない、悲觀して遂に死に至るといふには事情は如何にあるにせよ如何にも悲むべき嘆くべき事なれば、一層進みて彼等の心裏に立入りて其中心の要求に満足を興ふる策を講ぜねば何の爲にもならぬ、全然上下擧て悲觀思想につきて論じつゝるが唯自分の考て之を戒めるばかりで少しも其心中を聞きてやらぬは不親切である、誰とて悲觀を好むものはなからうが、事實煩悶して居る已上は十分聞きてやらねばならぬ、猶一層進みて之を聞きて見れば其位な事て何故心配をするのかと怪む程の事があるかもしれない、是は唯事件のみを見て其人の理想を見ぬからである、たとへば一家内が圓滿でないとか、又親の行爲が理想的でないとかいふことの爲に煩悶悲觀して死したといへば其位なことと言ふかもしれないが理想が高きだけ、小なる事柄でも大なる煩悶を生ずる、小松内府が忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずといはれたも其理想の高きだけ煩悶を高めたのである、遂に死を熊野に禱られたなどは千古涙の種である。

併こは現時青年の悲觀を論ずる人が唯何んとなく惡しき方

に於て彼は理想的に、倫理的に、社會的に、家庭的に何れにせよ、善きにせよ、惡しきにせよ、彼が人生に求めつゝある極、最後に絶對慈愛の佛陀あることを知らしめて踴躍歡喜精神上に其理想を攫み來りたる時多年の煩悶悲觀は拂はずして散じ、自ら雲霧消散するのである、此に於て煩惱即菩提にして煩悶は活動となり、生死即ち涅槃にして死の人生は一轉して平和なる理想的人生を實現し來ることとなるのである。宗教の信仰は此の如き悲觀思想の解脱されたる歸結である、然るに世上には恰も反對に宗教を信じたるが爲に悲觀思想に陥るかの如き誤解をなしつゝあるものもある、是は恰も正反對である、勿論宗教夫自身が眞實なる信樂を説くことが出來ずんば却て倫理教育と同様に律法主義に導きて安慰を興へざるのみならず、理想に走りて煩悶する様になるかもしれない、しかるに眞實の信樂を味ひ來りたる己上は如何なる煩悶悲觀も忽ち歡喜愛樂となるものである、吾人は世の悲觀に陥りつゝある青年に一刻も早く此佛陀眞實の愛樂を知らしめたい、少くとも之によりて最後の歸結に達し得るといふことだけなりとも一言聞かせて無分別に陥らぬやうに防ぎたい、吾人同朋の人々恐くば皆此點につきて滿腔の同情を持ちたまへる次第

なれば、深く心を留められんことを望むものである。

已上概して悲觀思想につきて述べたが他の諸の顯象は皆同一の思想が發現を異にしたるまでである、此の如く内に悲觀思想があるから、之が文學にあらはれて厭世的の文學があらはるゝ、源平の悲觀煩悶の精神は平家物語や源平盛衰記などにあらはるるのである、また文弱の風を起すも畢竟中心の眞實なる信樂なきゆゑ起るのである、恰も當時平家の公達が優艶に陥りたるやうなものである、かく精神空しきがゆゑに、自然に嗜好が五感の慾望に陥り遂に墮落して、風紀の廢頹となるのである、かの極端なる社會主義の如きも畢竟生活問題より起る此物質的要求の時代精神の代表である、内に鬱屈すれば憂悒となり、外にあらはれては社會主義の聲となる、加之近時著しくあらはるる悲惨なる犯罪の如きは皆此の如き心中の苦悶より、物質的要求より、肉の痴情より外部に向て破裂し來りたる現象である、昨日の大阪の新聞紙上の如き悲惨なる犯罪が三つも四つもあらはるるが如きは如何に悲むべき、憫むべき社會顯象であらうか、昔禹は罪人を見て車を上りて泣き周勃牛の喘を見て我政を顧みたといふが、吾人信仰の眼よりみれば、此の如き社會顯象も畢竟各人内心の反影として各

感

謝

古聖賢

古聖賢は吾人を照す鑑也、吾人鑑として之を追ふべしとはならず、吾人をして其凡愚を自覺せしむるの明鏡也、吾人をして其罪惡を懺悔せしむるの光明也、聖賢高うして我益々低く、聖賢清淨にして我益々垢穢、吾人古聖賢に對する毎に、忸怩として慙愧の念禁する能はざるを覺ふ、而して聖賢は却て垢穢の凡愚を導き、罪惡の吾人を憐みたまふ、聖賢尊くして我益々卑く、我卑くして益々聖賢の悲憫を蒙る、古聖賢の光明遂に吾人の闇を照破し盡さすむは止まざらむとす、吾人の罪惡を以てして遂に古聖賢の光明に勝つべからず、嗚呼大なる哉、古聖賢の境。

無常の觀念

吾人が一日一時も忘るべからざるものは無常の觀念也、而して常に常住の觀念を抱く、是實に慚愧し奉るべき也、聖人

自ら省る所なくはならぬ。

要するに人間は上下賢愚善惡に拘はらず、皆同様な心を持つて居るものである、唯其境遇の異なるに隨ひて種々の心的現象があらはるるのである、故に中心深く察すればすべて自分の身上で理解することが出来るのである、人間は同じ所を押ゆれば同じ様に、傷みを感ずるのである、若し此急所を察して手を下せば解決は容易である、併人間同士では理屈だけは分つても十分なる同情が運ばれぬ、然るに佛陀の慈悲に於ては飽迄徹到したる同情を見出すことが出来る、即ち先づ各個人が佛陀によりて救はれねばならぬのである、そして自分が救はれたる佛陀は必ず他人を救ふて下さることは疑を容れぬのである、世の宗教家、道德家、教育家が人を救ふ前に自ら救はれねば不可ぬ、吾人を救ふては無い、佛陀は必ず我々を救ふて下さる如く、國民全體を救ふて下さることは一點の疑がない。

恰も源平の混亂時代を過ぎて、鎌倉の自覺時代來り、絶對慈愛の念佛宗が日本全州を救済したるが如き時代が必ず再現することを確信する。(七月十八日朝大阪に於て記す)

宜はく、歸命の一念發得せば其時を以て娑婆のちはり、臨終とおもふべしと、吾人は平生業成に安んずるを知りて、眞實の欣求淨土、遠離穢土の心を生ずること難し、たとひ一たび其の心を生ずるも忽ちにして再び常住の世界に還るなり、世人皆云ふ、一たび死の門戸を通過せずんば眞實の信仰を得ること難しと、而り洵に其言の如し、而して亦其言の如く、通過し了して念念死の門を通りつゝあるを悟らず、嗚呼洵に懺愧すべき也、日夜來迎佛は常に吾人に現前したまふことを忘るべからざる也。

來迎佛

平生業成といふは平生臨終たれば也、佛の來迎を期せざるは常に來迎したまへば也、親鸞聖人九歳出家の時吟じたまひし古歌は常に人の知る所、而して聖人九十年の生涯は遂に「明日ありと思ふ心の仇櫻」といへる念々刻々の積れるものたるを悟らず、噫痛ましき哉、聖人十九歳磯長聖德太子の廟下に汝命根應十餘歳の告命を受けたまひて、益々無常の觀念に驅られて切に道を求めたまひ、終に二十九歳吉水入室に至るまで一刻も聖人の念頭に死の問題を去るあたはざりしならむ、

大聖釋尊亦十九歲出家より三十五歲成道に至るまでの宿題は生老病死也、吾人動もすれば云ふ人生問題と、而して人生問題の始終をなせる最大なる關門は生死なるを悟らず、而して此問題を解決したまへるものは是れ涅槃也、三十五歲成道の時實に涅槃の境は實現したまひし也、親鸞二十九歲吉水入室の時、臨終現前の時也、娑婆の終、臨終也、來迎佛は常に圍繞したまふ也、聖人信の一念於以て即ち往生を得と宣ひし所以の者文字の解釋にあらず、自身を以て解釋したまひし也、而して此時現前したる臨終は九十年間止むときなかりし也、此時來迎したまひし佛菩薩は即ち攝取の心光と共に一生守護したまひし也、吾人動もすれば不來迎を説きて常來迎を悟らず、平生業成を以て現世の常樂に醉はんとす、深く懺悔し奉る者也。

今日一日の事

古今の修養に心掛くるの人は何事も今日一日の事として其誓を立つべし、何んとならば毎日と思へば事懶く、一代と思へば大層に考へらるれば也、今日は毎日繰返さるる所に於て一代は今日の積れるものなれば也と、洵に其言の如くにして

獨去獨來の無常觀に想到らば何人が其獨を慎まざるべき、否其獨を慎まらずして止むべき、我身は現に是れ罪惡生死の凡夫にして、彌陀の五劫思惟の願は偏に親鸞一人が爲なりけりと所謂佛法は獨り喜ぶもの、洵に信仰問題は自己生死の解決也而して、亦明日にも知らぬ命なることを願みば、修養問題に他人の是非を計算に入らざるの余裕あらむや。

生死即涅槃

生死即涅槃は無常觀の解決也、煩惱即菩提とは罪惡觀の解決也、而して固より二者一也、人動もすれば佛教の無常觀を説くを知りて煩惱即菩提の罪惡解決の問題たるを悟らず、又吾人罪惡觀の經驗によりて信仰に入れるものは生死涅槃の無常解決の既に伴へるを悟らず、既に善導大師曰く、我身は現に是れ罪惡生死の凡夫と、歎異鈔に曰く、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろずのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことなりと、おぼせ候ひしと、罪惡煩惱も生死無常も唯佛の眞實にて常樂の境に導きたまふ、聖人讀して曰く、能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃と、又曰く惑染凡夫信心發、證知生死即涅槃と、佛教

修養の工夫としては適切なる教訓也、されど單に此に止らば徒らに言を代へて吾人自ら釣るに過ぎざる也、蓋し此教訓の主眼とする所は、明日ありと思ふ心の仇櫻といへる無常觀の伴ふあれば也、看よ此觀念なくんば何ぞ心中今日一日の感あらむや、然らずんば却て今日一日とは斷惡修善の律法主義に終らむ也、蓮如上人曰く、一度の誓は一期の誓也、若し一度誓を立て、命終らば一期の誓となるべければ也と、嗚呼是洵に今日一日の教訓の精神也。

其獨を慎む

君子は其獨を慎むとは信仰問題修養問題の中心也、信仰問題は子其父に代るべからず、父其子に代るに由なし、修養問題は自ら行はざるべからざるが爲めに行ひ、自ら行ふべからざるが爲に行はざる也、聖人屢々教を垂れたまはく、論議の爲にせず、勝他の爲にせず、利養の爲にせずと、所謂其意を誠にすとは自ら欺くこと勿れと也、惡臭を惡むが如く、好色を好するが如し、之を自ら憚るといふ故に君子は其獨を慎むと、是れ信仰問題修養問題の主眼にして人生眞面目の極致なり、されど、是決して難事にあらず、若し一たび人生、獨生獨死

廣しと雖、煩惱即菩提、生死即涅槃の外に出づべからず、而して因融至徳の御力は知らず識らずの間に、煩惱の氷解けて功德の水と爲したまふ、此に於て何等の光榮か吾人垢穢の凡愚古聖賢の跡を追ひて、共に金剛信を發して、横に生老病死の四流を超越す。噫何ぞ思議すべけむ、噫。

今日一日の事

- 一 今日一日三つの御恩を忘れず不足いふまじき事
 - 一 今日一日決して腹を立つまじき事
 - 一 今日一日虚言をいはず無理なことをすまじき事
 - 一 今日一日人のあしきことはいはず我がよきこといふまじき事
 - 一 今日一日の存命をよるこび家業を大切につとむべき事
- 右は唯今日一日の慎みにて候

講 話

相 續 心

(第二求道會土曜講話)

近 角 常 觀

今日の題は『相續心』と出して置きました。親鸞聖人の和讃の中に『帖外九首の和讃』といふがあつて、其中に

金剛堅固の信心は、佛の相續よりをこそ、

他力の方便なくしては、いかでか決定心をえん。

といふ一首があります。今日は此の意味をお話しする積りで此の題を選んで置きました。

毎に申す如くて、親鸞聖人は信仰は何處より来るか、佛陀より下さるのだといふお考であります、之は我々の第一に忘れてはならぬ處です。即ち今の和讃にある如く、金剛堅固の信心は「何より来るか、佛の相續より起る」、佛陀が久しい間御恵みをお續け下され、いつ迄も倦まず撓まず、我々が氣の附く迄我々を導いて下さる。其の佛陀廣大の相續心からして我々は信仰を獲させて貰ふのである。又「他力の方便なくしては、いかでか決定心を得ん」人が信仰に入るは全く他力の方便の御催ふしてある、佛の御手引きの力である、此の他力の御方便無くして、我々は決して決定心を得る事は出来ぬのだといふお意です。此の味は他力の信仰上實に味の存する點でことに此の和讃は信仰を得させて貰ふ味をば示されたも

を人生より得ることは出来なくなる。これを自分に求めて得ず、人に求めて得ず、自己の財産、一族、一として最後の安心を與へるものはなくなる。そこで人間は心中に種々なことを描いて安心しようとする、が出来ません。

近頃信仰問題が盛になつて或は見神の實驗などいふことが起つてきました。それにつきて多數の人が自分の心を痛めて其實驗を如何にしたらば得られるか、如何に勉めたら其境に達せられるかと苦しんで徒らに求めて居る。然しながら其絶對の信心は何處から来るかといふに「金剛堅固の信心は佛の相續より起る」此の一句が實に力強き言葉である。動かぬ地盤であります。親鸞聖人が他力信仰を宣傳された其味は、此一言に極まつて居ります。第一我々が最後に頼むべきもの、力とすべきものは何であるかといふにたゞ佛のめぐみのみである、其佛のめぐみは昨今に出来たのでもなく、また我々が假定するものでもない、どうも我々は假定するからいけない。佛は決して概念や觀念ではありません、我々を恵んで下さる其事實が即ち佛であります。其事實は久遠劫來蒙れる恵みであります。しかも其恵みは一度でなく相續して絶えず戴て居るのであります。相續とは變らぬことである。昨日あつて今日なくなり明日あつて明後日なくなるは相續ではありません、もし御恵みが一時であつて續かんならば如何して相續といへませう、即ち佛の慈悲は相續である。

しかるに我々は始めの間は佛の御恵みに氣が附かずして居ります。處が佛は其我々を哀愍し目さませんと常に無限の慈悲を灑いて下さる。此方は一年たつても五年たつても氣が

のとして稀なる難有き和讃であります。又此の一首に顯はれたる味はひがやがて聖人の全著書の骨目とも頂かれるのであります。て是より段々と此味をば御話をさせて頂く事に致します。

今日多くの人は信仰を以て自分の心からこさえるもの、如くに思ふて居るやうであります。處が斯の如く自分の心から作り出さうと思ふて居る故に彌々如何しても心を安んづる事が出来無い事となる。設ひ一度は自分で有り難くなり、貴くなつた氣になつても夫が決して長が續きが仕無い、忽ち元の妄念が起つて苦む事になつて来るのです。即ち自ら考へて「ア、さて自分は何うしても喜びを相續する事が出来ぬ、相續が出来ぬば確信では無い、抑も自分は如何にせばよいのであらうか」と、現時多くの人は唯かに此點に苦しみつゝあるのです。

猶ほ進めて申せば今日は世上一般に信仰の聲は非常に高いが而も初より純信仰の爲めに苦しむといふ事は無い、初は何か人生の事が思ふやうに行かぬとか、或は中心に満足が得られ無いとか、夫より漸次にして信仰を求め事になる傾てあります。更に亦社會一般の上に就いて考へて見るに、一般に人生に満足を見出して居る人達は決して信仰の方面に注意をして居無い、信仰の方面に注意して居ないあいだは、人生の總てに對して都合よくいつてゐるとおもふてありますが、其實少しも當にならぬのが人生である、しかるに其あてにならぬ人生にあつて當にならぬ財産や名譽をのみ當にしてゐるのである。處がだん／＼すすんでゆきて何物もたのみにならぬとしつたときには、いかにもがいても、頼みになるもの

つかない。もし佛の方より此感應なき我々をもうだめだと御捨てなされたなら我々は其慈悲を如何にして受けることが出来ようか。佛があくまで我々に恵みを相續して垂れて下さればこそ遂に我々も御慈悲に氣を附かせて戴けるのである。大歡喜と大安心を得させて下さるのである。故に信仰に於ては少しも我力といふものはない。此佛の相續あるが故に此の廣大のめぐみを頂くことが出来るのである。「金剛堅固の信心は佛の相續より起る」。實に無限の味のある御言葉であります。

今、之を佛に氣の附かぬ人にたへて話しますと、佛は覺者であります。我々は迷へる者であります。我々は夢の中、佛は目醒めた境である。其目醒めた境へ夢の我等をば引き入れて下さるのである。我々が信仰を求めといふは既に目を醒さんとしてるのであります。大乘起信論を一言に言ふてみますれば佛は昔より目醒めたる本覺の境より始覺の佛陀となりて我々を救はんとして下さるのである。我々は忽然として無明に沈淪して以來永く迷路をのみたどつて居るのである。全體自力といはず、他力といはず、又佛教といはず宗教といはずしても人生は迷であるとは事實である。しかるに佛は一點の汚れもなき覺者であつて其佛陀が此眠れる吾等を見給ふ時はいかに憐むべき者であらうか。佛陀の本性として救濟の御心を起さずには居られぬのである。佛陀はいかにしても我々を目醒さねばならぬと御覽なされるに違ひない。全體佛と我等の境は斯迄も懸隔して居る。其懸隔して居る佛陀の目醒めたる境へ、迷へる眠れる立場から我々が行かしてもらふのである。其れ

が佛に歸命するといふ事である。先づ大體はかゝつてあります。さて我等ねむつてあるものが、みづからめをさまし、みづから佛陀の境にゆかうとするのは是が自力である。處が我々より思ひ切り聲を出して喚び起して下さる其呼聲の御方が他力でありませぬ。我々が自分で目を醒し迷を開きて行かふとすると我々は久遠劫來無明に沈んで迷ひ來り眠り來つたものである、今も眠りの境迷の境にあるものであるのに迷へるものゝ力にて如何して悟ることが出來ませうか、我々は出來ませぬ。其醒めることの出來ない我々を佛は常に喚び起し我々が目の醒めるまでよびつけて下さるのであります。實にこれはありがたい事でありませぬ。阿彌陀佛の本願とは何んであるか。涅槃の境は實に廣大であるが我々は自分でゆけません、處て其涅槃の境界より智慧と慈悲の塊として我々を救ひ導ひかんと出現して下されたが阿彌陀佛であります。和讃に

無明の暗夜をあはれみて

法身の光輪さわかなく

無碍光佛としめしてぞ

安養界に影現する。

法身の光輪さわかなく大なる境より眠れるものを呼び起す爲に大なる御力をたれたまふ。實に無碍光佛は光である。しかし世人の多くが光といへば直ぐ冷淡に五官に觸れる光であるかの様にふもふからいけな、光とは無明の闇を破るありがたい光であります、其我々をよびさまして下さる聲、慈悲の光が阿彌陀佛となりたまふ。其慈悲の佛がよびづめにして

下さつて、我々がひよつと目をさまして、さて廣大の慈悲がありがたいとしらしていた、いたとき金剛堅固の信心を戴いたのであります。

かくいへば或人は自分でかくもねばならぬ、信仰を得ねばならぬ、佛の御呼聲にめをさましてからでなくてはならぬと苦しむかもしれぬ。しかし其苦はよこからみてゐるから起るのである。今我々は現に眠れるもの、無明に沈めるものであります。此眠れる我々が、初めて佛の光に出逢ひたてまつれば、さめようと思つてもさめざるを得ない、あゝながら自分さまようてきた、佛のめぐみはひかしから此如く不斷に御照らし下されてゐたかといふより外はないのであります。即ち信ずるは我が信ずるに非ず、信ぜさせて助けるといふ佛の御慈悲であります。諸君が既に信ぜねばならぬと力むのは即ち我と我心を眞實ならしめんと企てるのである。人間は到底眞實の心は出ない。此事は『教行信證』の信卷の三心釋の下に極わかりよくいふある。

佛意はかりがたし、しかりといへども、ひそかにこの心を推するに一切の群生海、無始よりこのかた、乃至今日今時に至るまで穢惡汚染にして清淨の心なし、虛假陷僞にして眞實の心なし、

實に其通りである。もう我々が一度懺悔すれば其懺悔の下に忽ち人にほこらうとする念が頭をもちあげてくる、又我々が信仰を求むるにも直ぐに自身をつくらふ心が起つてくる。人に善をすれば人にしめしたいといふ心が起つてくる。實に何をしてまことの事は出來ぬ眞實の事は出來ないのであります。

す。實に親鸞聖人は思ひ断つた事をいはれました、ことに「一切の群生海無始よりこのかた今日今時」といはれたうちにはなにもかも、もれるものはありません。聖人の一代は如此くおもひきつた宣言を我々に下したまはつたのである。

又聖人は善導大師の至誠心釋中の言葉に「外に賢善精進の相を現じて内に虚假を懐くことなかれ」といはれた、これは内外共に清くせよとの言葉である。然るに親鸞聖人は如何にこれをよまれたか、外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虚假を懐けばなりと、人間は不淨な淺ましいものであるから外にえらさうな顔をするなど我々の虚飾を捨てよといふて下さつたのである。實に我々は先程もいふ如く懺悔をすれば直に懺悔をしたとほこり、筆をとりに告白すれば又飾りたい心がある。實に頭の先より足の爪先まで一として眞實のものはない。内に虚假を懐けばなり」との御宣言は我々にとりてまことにありがたい御言葉である。實に我心は闇である、此上なき闇である。闇といへば我心をいひあらはすにまだよすぎる。我々は實に流轉輪廻の身である。此淺ましき我々が自分て佛の眞境を見んとしても如何して出來よう、決して出來ませぬ。見んとすればするだけ、迷にふみこむばかりである。さればこそ聖人は曰く

「こゝを以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫して不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じ給ひしとき三業の所修し、一念一刹那も清淨ならざることなし、眞心ならざることなし、如來清淨の眞心をもつて、圓融無碍、不可思議、不可稱、不可説の至徳を成就したまへり。如來の至心を以

て諸有の一切煩惱惡行邪智の群生海に廻施したまへり此書方がキチン、とゆるみなくかいてあつて我々の胸に響き渡ります、一切の群生海とは即ち今私自身の身の上で到底動かぬ所であります。

我々は如何しても清淨にして眞實にすることは出來ない、かかるが故に、我々眞實の心なきものに佛の眞實を廻施せんとして不可思議兆載永劫の御修行を佛がして下さつたのである。聖人の本願といはれた有りがたみはこゝである。我々はたゞ光とき、慈悲と承つたはけてはわからぬ、其光とは如何、其慈悲とは如何、こゝを以て如來一切苦惱の群生海を悲憫して……一念一刹那も清淨ならざることなし」と其光、其慈悲を事實を以て私に示して下さつたのである。是即ち我々が信仰を得させて戴く根本である。所謂、無明の暗夜の我等をあはれみ、如來は、不可思議兆載永劫の久しき間菩薩の行を行じたまひしとき、佛は如何なる苦毒の中に止るとも衆生の爲に忍んで悔いたまはなかつた。即ち或は長者の息子となり、或は賤しき者と生れ、種々雑多の苦勞をして私共を導いて下さつたのである。

佛には法、報、應、の三身がある。其應身の釋尊の過去世に於ての物語でも本生譚にある如く其御苦勞をよく戴くことが出來ます。今報身の彌陀佛が御苦勞なすつた時に三業の所修一念一刹那も清淨ならざることなく、眞實ならざることなく、三業とは身、口、意の三業であります。身も意も口も佛は清淨眞實であつた。其眞實清淨の塊を以て我々に廻向して下さるのであります。我々無明の闇に迷ふて居る物を

おはれんで下さる御慈悲の光が永却の闇をも晴らして下さるのである。此光が即ち如来の眞實である。其佛の眞實をば、我々が用ひさしてもらふのである。我々が佛の眞實を頂きて用ゐる味は實に聖人の信仰の極致であります。善導大師の文に

不善三業必須眞實心中捨

又若 起善三業必須眞實心中作

とある、この「須」の意は本來は「スベカラク……ナスベシ」とよむが通常である。然るに聖人はこれを一轉して

不善の三業をば、かならず眞實心中に捨てたまへるをもちひよ、

又善の三業を起さばかならず眞實心中になしたまへるをもちひよ、

とよまれた。善導大師の讀まれたのとは大違てあります。我々は爲すべしといはれては、到底ゆかせせん。けれどももちひよといはれたのは實にありがたひ。蓮如上人は其御一代開書に曰く。

かたみかには六字のみなをのこしをく

なからんのちはたれももちひよ

とこの用ひよとはまことを用ひるのであります。

處がまたまことといふと大層抽象的になります。其まことを具體的に言へば人を飽ませて信じ人を愛することであり、そこで信樂に移るのです。信樂とは信は佛に疑なく信じ奉ること、樂とは佛を歡び樂しむ心です。今、人についてこれをいひませう、私の經驗上自分の心をまことになし又人に對し

力あるによりて、我々が人を疑がひ自己を疑がひ最後には社會一切を疑つた其極に絶對の大慈悲に出して戴けるのである。即ち佛の御力で氣づかせて頂たくのである。佛陀の信じ愛して下さる信樂の味はつきぬものであります。

そこで聖人は直ちに此信樂をば翻譯して歡喜、愛樂と申されてある。信の卷にのたまはく。

信樂といふは即ち是如来の満足、大悲、圓融、無碍の信心海なり。このゆへに疑蓋間雜あることなし、かるがゆへに

信樂と名づく、すなはち利他廻向の至心をもつて信樂の體とする也。しかるに無始よりこのかた、一切の群生海無

明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に縛せられて清淨の信樂なし、法爾として眞實の信樂なし、こゝを以て无上

の功徳値遇しがたく最勝の淨信獲得しがたし。……………

此虚假、雜毒の善をもて無量光明土に生ぜん欲するこれ必らず不可なり、なにを以ての故に正しく如来菩薩の行を行じたまひしとき三業の所修乃至一念一刹那も疑蓋まじは

ることなきによりてなり……………如来苦惱の群生海を悲憐して無碍廣大の淨信を以て諸有海に廻施したまへり。これを利他信實の信心となづく。

全く佛の相續心である。

進んで欲生心についてお話いたします。欲生といふは廻向であります。廻向といふは自己の一切をあげて他に施する事であり、念佛稱ふるにしても他の爲に念佛を申すならばこれを廻向するのである。しかるに聖人は信の卷にのたまは

て眞實のまことをすることは人としては如何しても出来ないのである。人を疑はず人を憎まずありたいが出来ません。人を疑がひ憎むゆゑにいけないのである。處がまことはどうかといふに如何なる事あるとも人を疑はず又人が如何なる失禮なことを加へても、つゆにくまず、疑はずしてこれを信じあはれみ、同情をよせるのがまことであります。

處がこれは如何しても出来ぬ。そも、世の人の苦の本は疑である。しかして人を憎み人を隔てるのは則ち我々にまことなき證據である。しかるに其まことは佛にあらはれて、佛は我々を信じ、我等をあはれみ、我等をめぐみ下さる。其佛のまことがあればこそ、まことのつゆなき身にもまことかあらはれて下さるのである。我々より佛を愛し佛を信ずることには出来ない。我々は常に佛にそむき申譯なき事のみして居る。其佛にそむき申譯なき事のみして居る我等をひとしほあはれんで下さるのである。かるがゆゑに其佛のまことが徹到して我々のようなきことなきものも佛にむかふ様になり、信じ奉る様になるのである。そも、人は信仰に入らぬ前迄はみな佛を疑つて居るのである。又かくいふ私は人にこの様にいたしてありますが、或時は腹をたて、人を疑がひ憎む事もあり、實に淺ましい事ですが、これは人の本性である。しかるに佛は、いかなる人と雖も疑がひたまはず、これを信じ愛して下さる、これ實に佛のまことたるが所以である。其まことは實にあり難い、しかも其まことなるや、不可思議兆截永却以來のまことである。其まことは即ち飽ませて信じ飽ませて變ることなき佛の相續心であります。其偉大なる相續心の御

然るに微塵界の有情煩惱海に流轉し生死海に漂没して眞實の廻向心なし清淨の廻向心なし。と仰せられた。

人間は少しでも此方から人に譲り人に恵みをかけ、同情を運ぶ様にすれば大變よろしい。處が實際は人に施し人に譲らふとあもふても、人に施しては名譽を求め、人に譲つては内心の満足を得ようと考へ決してたゞては人に施して居らぬ。即ち所謂、眞に與へるといふ事は出来ないのである。其證據には我々が人に物を出すときには、何かを得るためにだす、又人が憎むとき自分も憎む、又一つの物を取りあつて譲る場合にも實際は譲るけれども内心に於ては決して譲られてない。結局人間は絶對的に廻向心なしであります。

もし我々に廻向が出来るとれもふて居たならば大變な誤解であります。こゝに於てか、聖人は次に

このゆへに如来一切苦惱の群生海を發哀して菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修乃至一念一刹那も廻向心を首として大悲心を成就する事を得たまへるがゆへに利

他眞實の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり。欲生即ちこれ廻向心なり。これすなはち大悲心なるがゆゑに疑

蓋まじはふることなし

と申された。以上三心釋を説きて佛の所謂まことなるものが解つた。即ち佛が其慈愛を我々の上にむけて下さる其ればかりである。其佛の御めぐみをば受けるより外はないのである。其佛のめぐみを信ずることは我が信ずるに非ず、佛より我を信じたまふのである。佛陀の相續心の一大事實であります。

いかに疑の人間もこの佛陀の相續大慈悲に接しては感動し、
いかで佛を信ぜず居られませう。「あゝありがたい」といふ
心が自然に起らず居られない。此喜の心は自分の心から出
たのではない。佛の相續によりて起つた心であります。それほど
我等の上にめぐみをかけて下さるかと思ふこのころがね
ころのです。

「金剛堅固の信心は、
佛の相續より起る、

私は近頃此御和讃に氣をつげさせていたゞきました。

他力の方便なくしては、

いかで決定心を得む」

決定心を得るは全く佛の御手廻してあります。

佛陀の慈悲が我等の心に届いて下されて決定心——決定心
とは疑ひたくても疑はれぬ心です。我々からは決して此の決
定心は出ない。たゞ佛の方便によるのである。砂糖をなめれば
甘いといふは事實である、いかにしても否定する事は出来ぬ
老人でも小供でも同一甘味である。その如く佛の御慈悲の貴
きはそれをいたゞいた人等は老若を問はず同一に貴く有りが
たいのである。其境になれば今迄の事皆他力の方便であつた
と氣附かせていたゞけます。決定心は金剛心、いかにしても
打けず事出来ないのである。此はたゞ冷暖自知の外ありま
せぬ。眞實の信仰は、佛の相續から起り又佛の相續によりて
相續されるのであります。恰かも河上の水があるかぎり河
の水が流れる如く佛の相續ある上は信心も相續する事が出来
るのであります。

る、此衣の爲に我はこれまでどれほどの苦勞をしたのかしれ
ない。どうか親の心をおもふて此着物をきてくれ」といふは
なしてあつた。實にありがたい親である。親が自ら織つて下
すつた着物、それをさほどどうまつに思ふのではないけれど
私もおもつてゐる。かにもふた事がありますので非常に適切
に感じます。我々が人生に處して富貴榮達を欲するはみな此
の娘の如くである、親の子に對して一念一刹那も清淨眞實な
らざることなく一針一糸もみな親の慈悲の塊であります。
處が世間に賣つて居るものは表面斗りて其ありがたい心がこ
もつて居らぬ。それを目の先の欲斗りにまよふてほしがるとは
實に淺ましき事である。佛陀の親も亦如此し、たゞその本
願の衣に一度手を通してありがたいとよろこんでくれ、
ばよいのである。今日は信仰がだん／＼盛になつてきたよう
だが、つい二三年前迄は念佛は耻かしい、じみなものと一般
におもふてゐた、最もじみなこの念佛を佛が最も私等によ
とれもふてこしらへておいて下されたのであります。

先にもいふたとほり佛のまこと念佛を用ひよといふて下さ
れる故それを用ひさせていたゞくばかりであります。南無阿
彌陀佛の六字は佛のまことである、此佛のまことの六字
を我々に下された、『教行信證』の劈頭にのたまはく

つゝしんで淨土眞宗を案するに二種の廻向あり。一つに
は往相、二つには還相なり。

とあります。何を廻向して下されるかといふに即ち佛のまこ
とを下さるのであります。我々は其まことを用ゐるのである。
すべて何事も信仰の事は此外に一つも洩れませぬ。今日は少
しこまかい處をいひまして定めてきゞづらかつたらうとおも
ひます。

先日私の處へ江州から牧田といふ人が來り、其人が信仰の
告白四冊もつてきました。其れみましたが其中に其人が御信
心を戴いた時の或人の説教があります。其れを拜讀するに
實にありがたき比喩がひいてある。今日は猶ほ一つ此話をい
たして講話をおはります。

例は甚だ卑近のものであります、一人の娘がある。其娘が大
層我儘で非常に衣服をほしががる。それで親に着物をこしらへ
てくれと頻りにせまります。處が親の方ではこしらへてやり
たきは山々なれど家貧にして悲しい哉出来ぬ。其爲に種々
苦勞をして食ふ物も食はない、やつと一反の反物を作つて
くれました娘を愛するまゝに地質といひ縞柄といひ實に娘に
此上なくふさはしいものを作つて、どんなに喜ぶだらうとお
もつてむすめにやりました。處が娘はそれをみて、これを着ざ
るのみか大に不平をいふた、曰く大變質朴で田舎風でみつと
もない自分のほしいとおもふのはこんなのではない。人のき
てるような、買つた品物がほしいのだと如何しても我儘いふ
てきてくれない。親の方では實に苦心慘澹して作つたものゆ
え、たゞ一言「おかあさんありがたう」といふてきてくれれば
それで充分満足するのであります。しかるに却つてきないの
みか不平を並べ、徒らに人の風をうらやんで働らかうとし
ない。毎日／＼遊惰に暮して居ります。親は末をねもふて大層
心配して居るけれども、よくならない。てよびつけてはなしを
してきかせました。一體其方はあまりに氣儘である、其方は
人の事斗り羨やんで居るが、それは却つて貴様の爲にならな
いのである。おまへはわからぬが兩親の目でよくわかつて居

告白

はてなきめぐみ

刑部 妙子

したひよる蝶をもたふす毒草に

なほさしそふかあまつ日の影

毒草の如き淺ましき私が此度はからずも佛陀大悲の御手によ
りて慈光みち／＼たる淨土に出していたゞきました。實にも
う私は罪の洞の暗黒中に永久地獄の苦を受けて居らねばなら
ぬのでしたを、思へば／＼難有さの極み唯感泣の外は御座り
ませぬ。

私は一體幼少より沈み勝ちな性質で御座りましたが、丁度今
より四年前最も敬慕して居た人に一度もまみぬむ折なくして
永く御訣れ致しました、その失望落膽のあまり死といふもの
ゝ怨めしさを痛切に感じて生死の問題につき非常になやみ出
しました、忽然と來りて忽然と去るその來し方も行末も茫と
して知るよしもない生命といふものはいかに不思議であ
る、思へば實にはかなき人間がした事などは如何に偉大な
る事業といへども一瞬のまぼろしに過ぎないのだと思ひて生
きて居る張合もなくなり、永遠の生命とは何ぞやなどいもう
此時分は身に負ふ務をすら忘れてたゞ／＼之をのみ思ひ續け
て居りました、併し思へば思ふほど世は不可解になり分らぬ

事を明めむとするわが心までがわからず、友人になど話すとヒズテリ、だの變物だのと笑はれてしまふので遂には世の中の人は皆愚である、我思など解してくる人はない、自分は高き理想に憧れて惱むて居る、凡人以上である、天才は現實に満足するものでない煩悶は當然である、など、天才さどりて居りました。實に／＼消えて入りたさね慙かしさで御座ります。併しそれで心の安かる筈なく、そろ／＼世人の凡愚な生活が羨ましくなり今度は反對に大俗化して此寂しさあぢきなき思を打消さうとつとめました、されど苦はすこしも減じませぬのみかなまじ競争心だの名譽心だの世を怨み人を疑つた末、世はとう／＼私をば悪人にしてしまつた、しかたがない、よしそれなら女夜叉の本性を現はしてやらう、など、淺ましき心を起し全く意識的に自利の人になりましたがかくては、いよ／＼何も彼も氣に入らず、遂にはわが心に愛想をつかして反對に利他に越さましたが之はなほ苦しい、のみならず充分に満足と興ふことは出来ないのでわがかり、せん方づきてつ／＼考へまして、どうも私は非常に我儘である、自ら幸福な境遇に居るを知らながらそれに満足出来ず何か不足を感じてゐる、どうもこの心が直らぬ限りは如何にしても満足は出来まい、併し何にか安慰が求められたらこの心も自然なほるであらう、と思ひ最も好める音楽を習ひはじめました之は一昨年のものであります、實は一二度友人に誘はれてキリスト教會に行つた事がありましたかどうかといふものか牧師の子風なのが氣に入らず、云はれるまでが表面だけのやうに思はれてすこしも信じる心が起りませぬ故宗教はだめとあきら

ずどうも幕一つ隔てた様で自烈度くなり、御惠送書籍を拜見すれば分つたのかわからぬのか滅茶々々になる、懺悔録なども先生の御苦しみの御有様は實に御同情申上げて讀むて居りますが佛陀の御惠に御氣付かれ遊ばした處になるとまるで手の中のもの奪はれた様でがっかりしてしまふといふ有様。これより二週間といふものは暗黒中の暗黒で何事も手につかず宅の人々が案じてくれるのがうらやましい様に思はれる、其心がいかに淺ましいと歎き、叱られ、ばすく怒つて後悔ゆる事甚しく、私はいかに思知らずである輕薄であると自分の我儘が氣になつてたまらず、肝心の佛様はすこしも有難く感じない、有難くもないに強いて難有く思ひ御念佛申すといふ事はどうしても出来ない。あ、私はよく／＼佛性うすき身である、念佛をすら唱へることが出来ぬ、世に私ほど疑深い者が又とあらうか、私はもう宗教は信じ得られぬのかも知れない、い、もう勝手になれ、地獄へ落ちやうがどうしやうがたまはぬ、私にはこれ以上考へる事は出来ぬ。と自分の考にて御慈悲を分らせやうと致しました故こゝにて愈力盡き全く自暴自棄になりどうかなるまで先生にも何も申上げまいと思ひました。がさうすると猶更心細い、今はもう佛様より先生の方が頼みに思はれどうかして頂きたいと御講話を伺ひに九段へ出ましたその歸途、自力では何も出来ぬ、わが考すらも他力によるといふのならば佛光を仰ぎたい安慰を得たいと思ふのも他力ではないか、然らば信じ得られぬといふのも他力ではないか、結局人は運命のまに／＼漂ふ外はない佛陀は何故に難有いのであらう等と思ひました。實に／＼恐多い事、慙愧に

めて藝術の方へゆきましたが、どうもむづかしいばかりで之で安慰を得るのはいつのことか分りませぬ、奏樂中のある一瞬にすべてを忘るゝ事も稀には有りませんが後では一層悲哀の念が起り忘れむとつとめた根本の愁がいよ／＼ますますばかりです。残るは依然たる寂寥の思ばかり、世の中のもの何一つ心を樂しましむる事なくさながら果しもしらぬ霜枯の廣野の夕べに一人立つて居るかの様に思はれ日は暮れ行くに一點の燈火も見えぬ、もう淋しさ心細さの果にふと早稲田文學三月の巻にて近角先生の御話及求道會の模様を知り佛敎といふ事に氣が付いて何となくゆかしい様に思はれ、幸に友人で森川町の方へあがる人がありましたのでその方につれられて此五月六日の日曜に初めて佛敎の御講話といふ者を伺ひました、浮々とした教會と違ひ、地味なシンミリした所が初めから氣に入り御話を伺つてゐる間に何か深く胸にさざまれたものがありましたので歸宅後考へると何だか頼もしい、心を打あけて御座りましたが餘り厚面しいやうで感つて居りますと、何だかせき立てるものがある様な氣がして、では失禮かも知れぬが仕方がない幸に奥様は同窓のお方故此お方からお願ひしやうと思ひ書状もて苦悶のさまを御報知いたしました、すると直に「信仰の余瀝」懺悔録「求道」など御惠送下されし上、これよりは森川町と九段にて御二方様している／＼御懇に御説き下されましたが、私は自分の思を云ひあらはす言葉を知らず、満足に心中を申上げる事が出来ませぬ故先生の御仰せがどうしても急所に當ら

堪へませぬ。又私が敬慕して居た人は未だ信仰を得られずに亡くなられたらしいとの先生の御仰せを思ひ起し、では私も信仰を得る必要はない、同じく苦しむて果てれば本望であると思ひました、實に申譯なき事ばかりで御座ります、よくまあ罰があたりなむだと後になつて常に思ひ出され、先生より御親切なる御詞を頂く毎に胸を刺される様に感じ、いつか御詫をせねば申譯がないと思ひつゞけて居りましたが、改めてはいかにしても申上げられませぬから今こゝに明ら様に記して御免しを願ふので御座ります。併しその時はかく思ひつゝ歸宅し、故人の文を讀んで見ますと……、私は此時胸の底の底迄まはゆき迄の光明がさし込む様に思はれました。今までどうして心付かずに居りましたか故人の絶筆には先生が常々の御仰せと符節を合せる如き事か所々に見えます、故人は彼が最も崇拜せし日蓮上人によりて信仰を得られ同時に靈魂この土を去られたに相違ないと私には感ぜられました、そして實に信仰は絶對であるといふ事をしみ／＼覚え、故人にはもう永久對面の期なしと悲しむだが私も信仰を得られるれば肉の生活が終つた時必ず逢へる。と思ふと嬉しさがこみ上げ前途に燦然たる希望の星の掛れるを見とめて暗の世界に一道の光明がさし込みました。翌二十一日森川町にて御講話を拜聴し歸途牛天神裏手の坂にかゝつた時向ふを見ますと、遠き見はらしの末は霞か隴と消えて日は午ながら曇つた空はさながら夕景色の様でした、ふと私は宇宙の無窮なるを今更のやうに感じ、今わが踏めるこの地球の小なること、まして此處に立てる私の粟粒ほどにもなきことをしみ／＼覺えてこの

小なる人間がこの大なるものをはからんとせし事の愚なりしをつくく、さとり、かつて絶對の満足は與ふる事も得る事も出来ぬと歎いた事があつたが之はいかにしても萬有を統へ給ふ絶大なるもの、力によらねばならぬと思ひ、それから此絶大なるもの、力を考へるとどうも難有い、葉の緑も花の紅も我のかく在るも皆その力に支配されてゐてどれにも之れにも絶對の御慈悲が注がれて居るのであるとわかり、いかにも嬉しくてなりません、之が佛陀といふのかしらむ、併し佛陀は始ありて終なきものであるとかつて先生が仰せられた、然るに之は始も終もなき基督教の神と同じ様である、私の此考は正か不正か知らないが併しいかに思つても有がたいと思ひました時ふと心に浮びましたはかの聖人の光明本、彌陀佛の御姿をもわが光明の内におさめ入れ給ひしかの不可思議光佛といふのは此絶大なるもの、事ではあるまいか、然らば私も此光明の中に入れて下されたのである小我をはなれて大我に融合したといふのであらうか、何にしても嬉しくてたまらぬ私はどうして此御慈悲に心付かず居たのであらう、もう余計な心配をする事はない今まで何事も自分でする様に考へて喜びもし悲しみもしたのは全然誤謬であつた、とわからして頂きましたら張りつめた氣が急に弛むてそこへ其儘すわつてしまひたいやう、嬉しさに胸はどどり笑が浮ふやら涙がこぼれるやらほとんと狂氣の状態で江戸川縁まで無中で來ました、それから種々今までの事を思ひ廻らして見るといづれとして御慈悲ならざるなく、故人を自ら怪むまで慕つて居たのも唯事でない確かに御導きである、ことに近角先生の御情がひ

しと思て知られて涙を拭ひつゝ家に歸り、この由を御報せ致しました處直に御二方様より御よろこびの御書面を賜はりました、その内に、

「大悟十八遍小悟其數を知らずと申す事も有之候へばますます今後御味ひ被下候のいかに楽しく候はむと喜入候……信仰の一念にて佛になりたるやうに御考なき様我々は此世に存せん限りは佛陀の御光明中に攝取されて如來の大慈悲を仰ぎ奉る次第に候」

「我々は淺はかなる凡夫に候へば唯目を覺さして頂ぎしのみにて此身は依然として前の迷へる時の身と同じに候」

實に有がたき御言葉、私は御慈悲の分つた嬉しさに満足し切つてしまつたのでありました、大我に融合した等と思ふたれど煩惱具足の凡夫たる以上は絶對に融合する事は出来ぬ、未だ目的の地は遠い、これから一歩一歩進んでゆかねばならぬ、とは思ひましたが、この時は如來の大慈大悲はよくわかつてを分らして頂きました佛陀の御恵には未だ氣がつかまぜんむだ故、「佛陀の御光明中に攝取されて」とか「目を覺さして頂いた」とかいふ方はあまり感じませんでした、唯念佛者は無碍の一道なりといひ、肉の生活終れば久遠の未來を有する佛になり盡十方無碍の光明に一味にして一切の衆生を利益するといひ、念佛申すのみぞ未通りたる大慈悲心等といふ事がいかに嬉しくて有難くてたまりませんでした。

かくして喜のうちに四五日を経ましたが氣が落付くに從ひ煩惱が頭をもたげて來て以前のやうにカンシヤクも起れば人も憎らしく思ふやうになり間違つてゐると思ふてもどうしても

腹が立つてなりませぬ、私はなぜかうであらうこれでは信仰を得た甲斐がない、煩惱といふは恐しく力強いものである、とこれが又苦になる様になりました。この時に至つて眞に佛陀の御慈悲がわかつたので御座りました、どうも考へれば考へるほど自分はあくまでも罪深きものである、御慈悲をかけて下さればすぐつけ上り自分勝手な事ばかり思ふ、恩はすぐ忘れても怨はいつまでも忘れぬ、我愆の深くて慈悲の心は少しもない、實に蛇のやうに執念が強く熊鷹のやうに貪慾が深い、と自分ながら怖しく、之を人に知らせじとして居た心が猶もろしい、女は罪の深い者ではあるが私ほどおそろしい者は又とあるまい實に女夜叉である、十方三世の諸佛に捨てらるゝも當然である、と非常な罪惡觀に陥りました末に、かく思ひました、之は屹度過去によほどの惡事をして既に畜生道に落つべきであつたのが如何かいふ事て人間に生れたのであらうどうしても人間並の心でないこの様な心の者が平氣で淨土へ行く事は出来ぬ、私のすみかは地獄より外はない地獄の苦でも受けねば罪は滅しない、いかに惡人でも平氣で淨土の樂を受ける事は出来ぬ、と一夜つくつく思つて居りますと何か知らず「地獄へゆく道は塞いでしまつたお前は淨土より外へゆく事は出来ぬ」といふ聲が聞えた様に感じて私はもう實に大聲あげて泣きたくなりました、どうしてよいかわかりませぬ、難有さ添けなきの上をこして感謝の言葉なく胸は張りさけむばかりでたまらず起き上り又打俯して涙にむせびつゝ念佛申して居りました。實に久遠劫より今まで唱へ得ざりし眞の念佛がこの時はじめて口に出しました。

翌朝歎異鈔を拜讀致しますと「罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけむが爲の願にてまします」がひと身にしみて有がたく頂けました、あゝ實に過古現世に於て敷しれぬ罪をつくりその爲めに御恵がわかりながらよろこべざりし私のやうな物を助けむと思ひしめて五劫が間御苦心下され、しかもこの惡人をすくふ能はずむは正覺をとらじとまで思ひしめし下されたる御慈悲の忝じけなき難有さ、思へば胸がふさがつて唯涙のみ出て参ります。

あゝ無碍の光明は遂に私の罪の胸にもさし込むて下されました、かくまであつき如來の御恵を頂く事が出来ましたのも皆佛陀が御導き下さいましたから御座りました、恩知らずの私がかくまで御慈悲がよろこべますのもよそ事とは思はれませぬ。思へば此世の惱いばかりつよくとも地獄の苦には及びませぬ、かぎりなき苦をも受けむと思つた私が窮りなき樂を得ました事たゞ夢かとばかりおもはれます、あゝ何たる御慈悲で御座りませう、思ひ來ればこの甲斐なき禿筆などして、御念佛申すより外はないので御座ります。

思へば私はよく／＼宿惡もさきものと見なまして常に惡しき事のみ思はれよき事は一も出来ませぬ。

「惡業はざる凡夫なり、かゝる淺ましき三毒具足の惡機として、われと出離の道たねたる機を攝受し給はむがための五劫思惟の本願なるが故に唯あふぎて佛智を信受するにしかず」

實に今は如來より給はりし信念一つが私の眞の生命で御座り

まする。この「信」以外に私といふものはあるべくも御座りませぬ。あゝ思へば、難有き御慈悲、感謝の言葉を知りませぬ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

私の如き淺ましき者にも賜りたる尊き信仰をばこの難有き求道誌上にて明ら様に披瀝致し、人間の辭もて現はし難き窮りなき御恵をば宿縁同じき君達と共に讃仰し奉る事限りなき喜びて御座りまする。

金剛堅固の信心は 佛の相續よりある
他方の方便なくしては いかてか決定心を得む

~~~~~

一念佛往生の本願は、有智無智、持戒、破戒多聞小見を簡はず、在家出家を簡はず、一切有心の者は唱へ易く生じ易し、たとへば一月萬水に浮んで水の淺深を嫌ふことなく、太陽世界を照して地の高低を選ばざるが如し、法照禪師の五會法事證に曰く、彼佛の因中に弘誓を立つ、名を聞いて我を念せば總て迎來せん、貧窮と富貴とを簡はず、下智と高才とを簡はず、多聞と淨戒を持つとを簡はず、破戒と罪根の深きとを簡はず但だ廻心して多く念佛せしむれば、能く五障を變じて金と成さしむ。

《漢語燈錄》

聖傳

ジャータカ釋尊傳

五傳道

勝利の歌を謳ひて、なほ彼處に坐したまへるとき、菩薩もひたまはく、我の斯の如き勝利の王坐に來りし所以のものは、我無量劫に於て連綿たる生死をよく堪へ忍びしが爲なり、即ち我は頸より寶冠を戴ける頭を離して與へ、我が黒き眼、及我が心臓の肉を裂きてジャアリ王子カンハージャー王女、又はマッデー王后の如き王子等王女等王后等に供養しぬ。此座は我には勝利の座たり、榮光の座たり、此所に於て我宿願は遂げられたり。我なほ此座を去らじ」と静觀しつゝ座したまへり、いかにとならば、此七日間は入定にあたへられたり、曰く「たへなる君は七日間不動に座してかぎりなき涅槃のめぐみおもひけり」。

天使等漸く疑ひておもへらく、此日悉達多はなほ彼處にたゆたひ、座したまへり、未だ成し遂げ給はぬ處あるらし」と主、彼等の思を知りたまひ、疑を散せんが爲に空中に立ち奇蹟をあらはして菩薩にひとしき現形をみせしめたまひぬ。

此奇蹟によりて、天使等の疑惑を消除し、金剛座の西北に稍暫らく立ち給ひ「我が全能を獲しは其處なり」と菩薩無量劫

に於て修したまひし徳行の果の顯はれし座につきて觀し七日を費したまへり、其處を凝視の所と呼ぶ。

又王座と菩薩の立ちたまひし場所の間に寶石の修道場を作らたまひ東西に跨れる道場を往來したまふに七日を過したまへり、第四週に於て天使は菩提樹の西北に寶玉の寮を建立して大聖を招じぬ、されば主はそこに跌倒して、世のあらゆる萬物の關係に於て、或は書に於て無比の法を案じ出したまへり。

かく四週の間は、菩提樹に近く御座しけるも第五週には「牧者のニグロダ樹」といへるに趣きたまひ、眞如につきて寂然として觀じたまへり。

此時マアラ思惟すらく、我かくも長く彼に纏ひて過缺を見出さんと努めしが、何等の罪惡をも見出すこと能はず、而して今や全く我が力の及ぶ所に非ず」と悲歎にくれて路傍に坐せしが、やがて十六の線をひきつゝ十六の事につきておもひぬ、曰く、

我は彼の爲せし如く慈悲を行せざりし、故に、我は彼の如くならざりしなり、と一線をひきぬ。

我は彼の爲せし如く、善を行せず、獻身、智慧、勤勉、苦行、眞實、調意、清静、同情の行爲をも修せし事あらざりき、されば我は彼の如くならざるなりとなほ九つの線を附け加へぬ。

又我は十滿行、即ち知覺する物に就きて非凡の智識を得るに效果ある行をも修せし事ならずと第十一線をひきぬ。

我は傾癖、又嫌惡を離れ、或は慈悲心を獲る二重の奇蹟、

及全能を得べき十滿行をも追求せざりき、故に我は彼の如くならざりしなりと五線を附加したり、かく心に於て愁苦しつゝ十六線をひきおはりぬ。

折しも欲染、不滿、愛業のマアラが三女彼等の父を見失ひ彼方此方をさまよひつゝ「父や居ます」と求めつゝありしが漸く此所に彼を見出せり、父の憂愁に沈みつゝ地に畫けるを見、怪しみ彼にゆきて問ひぬ、「いかに父上よ父上はなど愛たげに見えおはずぞ」と答へけるは

「愛子よかの名高き隱士は我力より逃れつゝあり、長くも我は附き纏ひしが、たゞ徒にぞなりける、我これを悲しむ」と「さなことはいかにもあれよ父上、御心なやましたまふ勿れ、妾等彼を服し俘とせんに」と娘等なくさめたり、

「愛子等よ、汝等は如何なる手段でも彼を服せしむることあるべからず、彼は信に確立し、心散亂せず」

「されど父上、妾は女子にこそ侍れ、直ちに愛欲により捕へもて來らんに、さな悲歎したまひを父上よ」と彼等は大聖に行き近づきて曰く、「れ、聖なる御人よ、君にしも妾は謹しみ伏して仕へまつらん」とされど大聖は些かも意を注ぎたまはず怡然として目だに觸れたまはざりき、主は罪より全く清淨になりたまひて心専らに涅槃の歡喜を靜觀しつゝ座したまふなり。

マアラの娘等おもへらく「人の嗜好こそさまじくなれ、或は娘或は若婦或は中年の婦女或は老婦、われらは變現して彼に近づかん、さなり、さなりとて、各或はうら若き乙女に或は妖艶なる若婦に或は一人子をもらし婦女或は二人、三人、もち

し女に装ひ、或は白髪のお婦にさへ變化して聖者にゆき媚を呈して従順なる婢たらんことを語りぬ、されど大聖はこれをも顧みたまはざりき、罪障悉く滅し終りたまひぬる上は心動亂したまはざるなり。

されど大聖のたまはく、「去れ！何故に汝等かく努むるや、罪の道をたどる人にこそさはなすべけれ、我は愛欲を離れたり、悪意を除滅し愚戯を欲せず」と二句の偈もて退散せしめたまひぬ、曰く

何れの人か自制をば

みだしあたむ、たゞ一度

心の勝を得し人は

なごか失ふことやある

其罪なき身、信の身の

心はずべてを懐けるを

何の惑！何の罪！

汝はかれ人をいかにして

ほろびのみちにひかんとや、

害意も惑もなき身なり、

何の貪欲か彼人を

邪の路に導びかん

罪のなき者信の身の

心はずべてを懐けるを

何の惑！何の罪！

汝はかれ人をいかにして

ほろびの道にひかんとや、

せん術なくして此等の妖女等父に歸りて曰く、「父の言へる如く、彼は如何なる悪願も誘ふ事能はざるは實なり」と

聖者は此處に一週を過したまひて後マカリンダ樹にゆき、ろくに亦一週をすごしたまへり、マカリンダ蛇王は嵐の起るや長身を七重にして彼を護りたりしを以て何の煩もなく仙室に居ますが如く安穩に救済の德音を味ひたまへり。又次の一週はニージヤ、ヤタナ樹に往きたまへり。かくして七週を送りたまひしが、其間何等の欲をも起したまはざりき、たゞ禪定の喜ばしきが故に、其れより出づる果實の樂しきが故に暮したまへり。かく四十九日間座したまひし終の日に御顔を洗はんとの願を起したまへり、神の王サツカはミイロポラン樹の實を持ち來りて進めたまへり又蛇葛の刺もて作れる揚子と清き水とを運びぬ、されば主は揚子を用ひて口を清め御顔を洗ひ終りて樹の麓に座したまへり。其時中央印度度に向ひ、五百の車をもちてオリツサより旅しつゝありし商人タバツスとパールカとよべがありけり、時に天使は車を止めしめ主に食を供養し奉る様彼等が心を動かしぬ。彼等、飯菓と蜜菓をとりて、主にゆき曰ひけるは、

「あゝ、めぐみある君よわれらを哀愍したまひて願はくは此食を受け納れ給へ、」と佛陀受けんとしたまひしも鉢なきまゝ、何をもてかそをとるべき、佛陀は手もて取りたまはざるにとためらひたまひしに、世の保護者たる四天使天の四隅より來り、サツビヤにてつくれる鉢を捧げたりければこれを以て供養を受けたまひぬ。次に又黒玉にて作れるものもちきたり

しかば主は彼等の親切を嘉し、四個を積み重ねて一ととし其

内に食を入れ感謝を興へて食し終りたまひぬ。

二人の商人は佛陀と眞理の教とに歸依し奉り、公の弟子となれり、しかる時彼等主に申して曰く、「主よわれらに尊敬すべき紀念を興へたまへ」と、佛、右手を延して頭より毛髪を切り以て贈りたまへり。彼等は後にそれを塔に納めて寶としけりとぞ。

佛は彼處より立ち給ひて牧者のニグロダ樹に歸り樹下に端座してれもひ給へり、すなはち彼の得たまへる佛陀の眞境は甚深、微妙にして他をして悟らしめがたし、是を以て自身説くべき才能ありやと、これはすべての佛陀の危ぶみたまひし處なり。其時、大ブラマの統理者は叫びて曰はく「あはれ世は失なへり、あはれ世はすべて失なへり」と大千にみつる天使、天使長、統理者をひきつれ來り、主にゆきて曰はく「あゝ、聖なる主よ！眞理を宣傳したまへ、願はくは眞理を説きたまはんことを、あゝよき主よ」と言を盡して願ひ奉れり。

主は彼等の乞をゆるしたまひしがさらば先に唯にか眞境を現はさんと思惟したまひ、先づアララの事を思ひ浮べたまへり。アララは彼の最初の師たりしを以て、そを悟らんかとあぼしてなり、されどなほ熱慮したまひしに彼は七日前に死したりし事を氣付きたまへり、次にウダツカをねもひたまひしが彼亦其夜失せし亦を悟りたまひぬ、次に五隠士を思やり給へり、而していかに一時は彼等の、君に忠實に仕へ奉りしかを忍び、今は何處にかあるらんと計りたまひしにベナレスに於ける鹿園にあるをしりたまひぬ、乃ち主は決意して曰はく、

「我彼處に正義の國を開きなん」と

されど暫時大聖は菩提樹の近きあたりに日々の食を乞ひ給ひつゝ五月満月の夜に出立せんとおぼしたまひぬ。

十四日の曉天、夜將に明けんとする時、衣服及び鐵鉢を取りて、十八リグ斗りゆきたまひしとき、道程の半に於て隠士ウバツカに出で逢ひたまへり、ウバツカ主に如何にして佛になるべきかを問ひ奉れり、其夕漸くベナレスの傍なる隱家に達したまひぬ。

五隠士は既に遙かに佛を見奉り、互に囁きて曰く、「友よここにかの罍曇は來りぬ、見よ、彼は食を糞にし形骸の圓滿、五官の動作及び容貌の美をも回復せり、我等いかで彼を敬すべき、されど彼はたゞ高貴の人たり、安座する場所のみは與ふべしと。」

大聖は他心徹鑿力を以て彼等の心中のあもひをしりたまひ一切の衆生及天使等にも貫徹せざるなき慈悲心を集注したまひて彼等に向けたまへり、されば彼等の心を徹して其慈悲心は浸み渡りぬ、則ち君の近づきたまふにしたがひて、彼等もはや最初の決心を確守するあたはず、主の前に禮し敬虔なる思に於て、さまざまに禮をつくし、歡迎し奉れり。

さはいへ彼等は未だ主の佛たりたまひしを悟らずして君を呼びたてまつるに或は其名を以てし、或は「兄弟よ」などの言葉で以てせしかば、聖者は彼等に佛の位をあらはして宣はく、

「あゝ、隠者等よ、佛陀を彼の名にて呼ぶ勿れ、或は兄弟とも云ふ勿れ、我は、れゝ、隠者よ、内觀に於て清く、前に過ぎゆ

き給ひしものと同じき佛陀なり」として彼の爲にしつらはれし坐につき數萬の天使に聞遠されつゝ、五比丘に語りたまへり、時しも月は六月に於ける月舎の會合よりまさに昇りつゝありけるが此時にあたり主は正義の王國の源につきて説法したまへり、五比丘のうちコンダンヤは説法の終りに第一の果を得たり。

主は雨期の間其處に止りたまひ、次の日はキハトラに於て坐し、他の四人托鉢にゆきければバツバとかたりたまへり、バツバは其朝同じく第一の道果を得たり、次にバーヂヤ次にマハナーマは次にアツサージ亦同じき境に達せり、第五日に佛は總てを集めて靈魂の無有につきて説きたまへり、其説法の終りに於て五人各涅槃に到達しぬ。

此あたりに富貴の家に生れたる若者ヤツサとよぶあり、或夜世を厭ひて家を捨てたまひ出しか、佛は是を見たまひ道に入りやすきを知りて「我に來れヤツサよ」とよびたまひぬ。彼は佛の御教にあひ奉り第一の道果を得、次日に阿羅漢果を得たり。佛又ヤツサの一族五十四人も「我に來れ」の御喚聲もて順次に道果を得しめたまへり、かくして世には六十一人の阿羅漢出てたり。主は雨期も過ぎ中夏の宴も終りし時、六十一人の阿羅漢をば、各方面に送りて傳道せしめたまひぬ、曰く「行け、お、隱士等よ説き教へつゝ行けよ」と。御身はウルベラに行きたまひ道すがらカハシーヤ樹林に於て三十人の若き貴族等を服したまひぬ。

此等の少數は第一道果に達し、多くは第三道果を得たり、佛又彼等を各州に送り道を傳へしめ、なほも自身はウルベラ

汝火をまつるいけにへを

いかにしてかはなげうちし?

而して長老、大聖の御意を知り偈を以て答へ申さく、

多くの人は眼、耳、味により

他の人々は不淨の愛に

あるものはまたいけにへによる、

さはれ、罪ある上からは、

こほみな屑なり汚物なり、

さればわれ亦火の神に

まよひはせじな、大小の

供物に呪文もみいださじ、

而して佛弟子たるを示さんが爲に頭を佛陀の聖足につけて曰く「聖なる君は我主なり、我は弟子なり」と七度橄欖樹の一倍、二陪、三陪、七陪の高さに飛躍し又降り來りて佛陀を禮し奉り、恐懼して座を取りぬ。此奇蹟をみ大衆一聲に佛を稱へて曰く、「お、いかに佛陀の威力は大なるかな、かゝる邪教者と雖も佛を敬ひ奉れり、ウルベラカツサバすらも邪網を破りて佛陀に歸依し奉れり。」と

此時佛宣はく「我のウルベラカツサバを服せしは今一度のみならず前世にも亦彼、我に敗をとりぬ」とマハー、ナーラダ、カツサバ、ジャータカを説き四眞諦を演べたまへり。マガータ王及侍者の多くは第一果を證し他の者等も子弟となりぬ。王なほ嘗て彼の有せし五願を告げ彼の信を告白し奉り、次日佛陀を招ぜんことを請ひて側より立ち、稽首禮拜して去りき。

に至りたまへり。彼處に於て、三人の苦行者ウルベラカツサバの輩あり、常に火神を祀り犠牲を捧げ、火堂を造り、以て何物をも届服せんとせりき。三人は兄弟にて千人餘の子弟を有したり、佛其堂に至りたまひ、三千五百の奇蹟を行なひ、火神を平らげて彼等の迷をとき「我に來れ」の御言葉もて誘ひガヤンシーサ丘に於て火の説法をなしたまひぬ、彼等はこれによりて全く前非を悟り火器を抛ちて佛に歸依し遂に阿羅漢果を得たり。佛又此等の千人に侍せられつゝラージャガハに近き橄欖樹園に趣むきたまひぬ、こほ嘗てビンビサラ王になしたまひし約を果したまはん爲なりけり。

王、圍守より「主は來たりぬ」との報を得て無數の僧、貴族等をも具しつゝ來會し、佛足を頂禮したてまつれり。これらの聖なるみあしは、千幅輪を具し給ひ、頭には金紗の天蓋の如き後光を放ちたまふ。王、拜し終りて一方に座をとりぬ。時に僧及び貴族等カツサバの座に連れるを見て佛に問ひ奉りて曰さく、「大隱士がウルベラカツサバの許に子弟となりたまひしにや、又ウルベラカツサバが大聖の許に子弟となりしにや、此事や如何に」と。

大聖、彼等の疑ふ所を知りて長老カツサバに偈を以て告て曰はく、

いかなることをなればみし

お、ウルベラの住人よ!

なれあさましとおもひてか

火のかみすてし?ことわけを

汝に問はましカツサバよ

次の日ラージャガハに住める人々、既に佛に見え奉りし者、未だ其榮を得ざる者とを問はず、朝またさより佛陀を拜し奉らんとて蘆園に集ひぬ。六マイルの道は彼等の總てを容るゝ能はず、多くは徒らに信なる主の妙軀を眺むるのみにして彼等の歡を満たすあたはざりき、こほはヴンナビユー(稱美の場所)とよびて佛の大小の德行及び榮あるみすがたの美はうたはれたり、されど彼處は一人の隱士も路又は園に出てがたき程群集を以て餘地なかりき。

人曰ふ、「其日天なるサツカ神の王座温を覺ゆ、サツカ神其理を恵り、乃ち若きブラマンの形に份し、佛陀の前に降り來り佛、眞實、及び法の讚美を歌ひつゝ、主の爲に道を開きぬ、而して彼は次の句に於て佛を褒めつゝ前驅しぬ。曰く

五欲はなれし大聖は

ラージャガハにぞ來ましける、

シンジの金の榮光は

きよき相好にあふるなり、

よこしまなりし人みなも

つみやけがれをすてはて、

君に従ひきたりけり。

濁にそまぬ大聖は

ラーシヤガハにぞ來ましける、

シンジの金の榮光は

清き相好にあふるなり、

よこしまなりし人みなも

君にすぐはれまつりけり。

彼岸につきし大聖は

ラージャガハにぞ来ましける

シンジの金の榮光は

清き相好にあふるなり、

よこしまなり人みなも

流をこえて罪さえぬ。

聖懐も信もはかられぬ、

さよさほとけよ、十寶を

身に得たまへる大聖よ

數多の人にまもられて

ラージャガハにぞ来ましける。

庶民若きブラマンの美容を見つゝおもひぬ。このみなれぬ

若きブラマンはすぐれて麗はし、いづくより彼は来りしに

や、はた唯の息子にやあるらん」と若きブラマン、彼等の言

をき、詩句をもつて答へけるは、

無碍にまします賢しき主、

佛は人天の無上尊

羅漢は世の最幸ある身

予は大聖のしもべなり。と

然る時に主は天使長に開かれたる道に出てたまひ一千の隠士に侍せられつゝラージャガハに入りたまへり。王は大施物を法の爲に捧げぬ、乃ち金盃に玉の如く輝ける清水を入れ花

雜 錄

波斯紀行

鈴木 佛

鈴木佛君の名は本年第一號卷末に掲載せる君がコンスタンチノールより送られたる告別の書により記憶せらるゝなるべし、抑々予の君と相識るや明治三十三年四月予が西遊の時に在り、予の米國紐育に着せしとき新紙傳ふるに日本佛教徒の來遊を以てす、君大に喜びて予をウエストミンスターホテルに訪ひたまへり、蓋し君居常深く佛を信じ海外萬里同信の友少きを嘆きつゝありしが予の來遊を聞き喜び迎へらる、予亦一見舊知の感あり、蓋し宿縁深厚なるに由らずんばあらず、三十四年予等同志伯林に於て釋尊降誕會を行ひし時君等亦泰君と共に同じく降誕會を米國紐育に開けり、三十六年予京都に於て關西佛教青年會に於て演説す、君來聽し、予か宿を訪ひ、談、偶君か再び西遊の志あることを陳べらる、越えて數月、長崎より乗船せる事を報ぜらる、乃ち船の横濱に寄着するの日を期し、贈るに國文三部經、信仰之餘瀝、政教時報を以てす、船中信州上田の人山極松濤氏、君が佛を説くを聞き、此等の書を繙き廓然として開悟し、深く絶對の信仰に入れり、君か紐育に着してより、予に報ずるに此

を以て香はしつゝもたらしぬ。彼はそを佛の玉手に灑ぎ以て竹園とよべる地を佛に捧げんと證となしぬ。曰く、我は、あゝ我主よ三つの寶玉なくんば生くる能はず寶玉は何ぞ、佛法僧是なり。如何なる時も我、君に行き御教をこひ奉らん、しかも蘆の園は距離甚だ遙遠なり、然るに此の我が竹園とよべる園は近くして往きやすくまた佛のふさわしき御住處たるべし、願はくは我より其を受け給へ」と佛此庵室を受けたまふや、大地は震動して恰かも「佛教のいしづえは定まりぬ」といへるが如くなりき。主、竹園を受けて感謝の意を表し座より立ちて大衆に圍繞されつゝ彼處にゆきたまへり。其時ラージャガハの近くにサーリビユッタ及モッガラナとよべる二人の苦行者救の道を求めつゝありき。サーリビユッタ長老アッサジの托鉢しつゝあるを見て、いと感に打たれ、彼に「如何なるものも其因より出ず」といふ句をまなび、改宗して慈悲をよるこびぬ。彼は又友なるモッガラナに其句を教へしかば彼亦改宗して慈悲に接しけり。かく二人彼等の師より離れて主に歸命し奉りしにモッガラナは七日に於て、サーリビユッタは半月に於て阿羅漢果を得たり。佛は彼等を主なる弟子の位に任じたまへり。

事を以てし、且つ佛教同盟會及青年會の成立を報ず、一昨年夏予信州飯山附近の講習會に臨む、一日山極氏來訪して、審かに獲信の因縁及歸朝の事を語らる、氏及び宮崎氏は實に上田求道會の創立者なり、又予君に阿含經を送るべき依頼を受け、未だ果さず、昨年暮突然、彼告別の書を受く、爾來杳として君が消息に接せず、私かに君が安否を案じつゝありし、然れども、君は信心清淨の人必ずや天神君を守護して、其志を成さしめんことを期せり、六月二十九日高松佛教研究會に臨まんとして車中大阪朝日新聞を買ふ、偶々君が消息を傳へ、且つ波斯紀行を連載し肇む、予狂喜、手の舞ひ足の踏所を知らざる也、君性温厚玉の如し、世の冒險旅行家の流亞にあらず、唯信仰の力君を驅りて此の如きの遠征傳道を實現せしむ、乃ち之を轉載して我が同信の同朋と共に其歡喜を頌たんとす

近角常觀識

緒言

波斯は亞細亞の一帝國なるに拘らず、未だ我が邦との通商條約なく、又邦人の彼地に遊びたるもの少し。往年福島安定氏其の地に遊び、尋て井上雅二、中村裕吉の二氏相前後して其の一部を跋渉したり然れど邦人にして波斯を横断したるは鈴木佛氏を始とす。氏は土耳其より露國に出て、バクーより波斯に入り、ベルチスタンを經、本年四月印度のラホールに出づ。之れを第一回旅行とし暫時同地に休養し、更に程を起して第二の旅行に入り、四藏蒙古支那を經、來年四月歸朝の筈なり。

氏は丹波篠山の人、四歳にして父を喪ひ、兄弟五人七十有餘の祖父と三十未滿の母とに育てられ、八歳又祖父を喪ひ、出て、外祖父に寄り、又外祖父及び一兄一姉を喪ひ、家資湯盡、一家困厄を極む。氏尙書藩主の設立せる鳳鳴義塾に學び、十六歳始て大阪に出て、某辯護士の食客となり、翌年十七歳の時、僅に十數金を

側にして出て、袖歩野に臥し山に寝れ、東海道を経て東京に入り、志を得ず、更に無錢にて全島を回遊し、或は山野に起臥し、或は雨露と眠ひ、食を得るに途なく、饑餓三日に及びしことあり。二十一歳の時、密然外國に航せんとし、某國汽船に乘込み、ホーイと爲て南洋及歐米各國間を航し、英獨諸印南清等の語に通じ、數年の後歸朝せしむ、三十年四月再び帆船に乗じて、米國に航し、爾來或は米西戰爭に際して米軍に攻巴に從ひ、或は米國に於て勞働に従事し、傍コロムビア大學及組育大學等に於て哲學社會學を修め、遂にマスター、オプ、アーツの學位を得たり。三十四年印度緬甸に赴き、釋尊の事蹟を調査研究し、三十五年一時歸朝して京都岡崎町にある日蓮宗の中叡林の場に住じ、二三箇月教鞭を執り居りしが、其の際東京の佛敎大學より聘せられしも、自ら願ひて尙三四年の研學を欲むにあらざれば以て大學に教鞭を執るに足らずとし、之を謝絶したり。此の際幸ひ米國より再渡を促し、旅費として三百弗を送り來りたるを以て、三十六年三月三たび米國に航したり。爾來研學の傍米國に在りて佛敎の布教に従事し佛敎同盟會佛敎青年會等を組織し其の幹事となり以て佛敎を擴め現に米國人にして信徒たるもの頗る多く、米國に於ける佛敎の基礎既に鞏固となりたるを以て三十八年十月カスミアン海沿岸諸國の遊歴を企て、米國を出發して伊太利、希臘、土耳其を經、此の波斯行を企てしなり。此の紀行は、氏が隨處より、氏の實見たる當地空堀の鈴木幸馬氏に送り來りたる所、以下號を追うて本紙に採録す

米國を發して羅馬に至る

阿富汗斯坦探險を立ひ思ひまして、明治三十八年十月六日米國ボストン近くの避暑地たるマンチエスタを病氣を推して出發し、紐育に參りまして佛敎會の事務を天軸接三氏に引渡し、自分の書籍等は悉く同會に寄附致し、衣類は皆近所の貧乏人に布施して、愈々十八日午前十一時に伊太利國の汽船シ、リ一號に乗込まして、前後殆ど七年間も滞在し、第二の故郷とも云ふべき紐育を出帆することになりましたが船員は皆英語を解しないてすから食事の勝手が分りませんで、一日半も斷食と云ふ様な次第でしたが、漸く掛合しますると、下等船客五

る處です、衰へてこそ居れ、チタスの門コロセムの建築は、羅馬人全盛時代の文明が思ひやられます。

羅馬

宗教は日本同様形式的や、迷信の所は随分あるやうに見受けられますも、僧侶の獨身棲居や、寺院の脱俗生活は、一般人民の道徳に非常の關係を持つて居る様に思ひます。當節は社會と調和々と申しまして日本の佛敎を無暗に俗化させんとする人々が有りますが、之は餘程考へ物です。此の上には善人でも悪人でも基督を信ずることに依りて死後直に天國に生るとか云ふやうな不合理千萬のことを教へずに、佛敎印度教の如く輪廻轉生の觀念がありますれば、尙一層結構のことであると思ひます。悲しい事には紀元五百五十二年コンスタンチノブル會議の結果、獨斷的教條の下に斯る説は異端として否定致しましたものですから、亞米利加でも歐羅巴でも基督教國一般私徳の點に於きましては東洋諸國に劣りて居るのは確かです。當國にても餘り獨斷的教條的政略の激しき爲に自然反抗を起して破壊主義の無政府黨員や、無宗教的の快樂主義者が澤山飛び出して居ります。公使館の今井書記官に面會致しまして、露西亞へ入國の手續を伺ひますと、同國は同盟罷工にて非常の危険なれば、露西亞政府の保護は到底覺束なかるべしとの事でした。命が惜しい様では阿富汗斯坦の旅行は出来ませぬ。危険と承りましては腕が鳴りて堪りませぬ早速土耳其と露西亞の兩大使館へ出頭して入國許可を願ひました。所が露國の方は目下の場合故、生命の安全を保し能はざるも入國は許可するとのこととて、旅

六人づゝ一座となりて、一ツの鉢よりつつき食ひとのこととした、人足同様汚きこと言語道斷の伊太利人と一所のつゞき食も一切衆生を濟度せん爲に金殿玉樓を出て樹下石上從容として食を市に乞ひ給ひし釋尊を思ひますれば、少しも嫌なることは御座りませぬが、肉食を致しませぬ私には少し許り饑餓がまはります位伊太利人は佛蘭西人同様一日二回の食事ですから、まあ一日合せまして日本の饑餓屋の一杯程でした。

十二日間饑餓腹で、波風靜かに四千二百里の曠程も無事に、伊太利のネーブル港に上陸しましてグラランド、ホテル、ド、ヒス、ウと申します同地第一の大旅館に投宿して急に大盡風を吹かしました。何處も同じ金の威光は大したものので他の船客は嚴重なる税關の検査を受すにも關らず、私の手荷物は大旅館の御客人とてろくろく見もせずに通過しました。大抵の人間が苦しむのも嘆くのも罪を犯すのも、皆此の金の爲、財貨を貴ばざれば民をして盜を爲さしむと老子は云ひました。實に私は金の顔を見ると胸が悪くなります。ネーブル附近には、西歷七十九年ベスウイ山の噴火の爲に埋もれ、漸く千六百年後發掘せられたボンベイやヘルクラニウム等古代の都など、歴史上有名な處も澤山御座りますも、懷中が承知致しませぬので、翌朝早々羅馬府へ上等列車にて出かけた此の國の景色はバイロンやゲーテの詩で名高きもので山の工合畑の作り方稻藁三角形の瓦屋根、一寸日本と似て居ります。羅馬府は現今五十萬位の人口で、商業よりは宗教の中心、日本の京都、印度のヘナレスと云ふ様な處で、當國の皇帝の御住居であるし、何しろ全世界に天主教の政令の出づ

券は貰ひましたが、土耳其の方は何分にも我が國とは無條約國のことで、我が公使館より種々の交渉に與りても、不得要領に終りました所が段々基督教國の中に、日本の佛僧が阿富汗斯坦探險の途中滞在して居るとの風評がありまして、新聞記者達が旅館スプレングトへ遣つて參ります、其處で彼等に向つて一々氣焰を吹きますし、一寸出づるにも二頭立の馬車と云ふ勢ひ、過去の半生になき贅澤に、限りある路費は非常に淋しくなりました。明日の天長節の夜會にも是非にと、大山公使より請待を受けました。若し出席致しましたならば佛敎の學僧鈴木某と當國の貴顯方や各國の大使等に紹介致されまして、随分呼び者になりますれど、金錢や名譽が欲しくて旅行するてはありませぬし、何分にも出船の期日も迫りて居りますので、遂に御斷り申しました。所が公使は夫れては仕方ない、君が壯途を祝し、身體の健全を祈るとて握手せられました、明早朝の急行列車にてネーブルに引き返し、同日午後四時の船にて希臘のアゼンズに向ひます。如何に難攻不落の金城鐵壁たりとも打ち破らんとする精神を以て如何なる手段に依りても土耳其國を通過しますから何れ露領に入りて後に報知致します(十一月二日羅馬府に於て)

土耳其に向ふ

羅馬に於て少々身分不相應に暮しました結果と、成るべく旅費を永續させんと心で、又候船内下等室の一隅に荷物と同居致しまして、去る三日午後六時ネーブルを出帆しました。此のネーブル程何うも人間の悪い所は何國の船場でもありま



せん。さてバレモ、メシナ、カタニアの諸港を巡りて、十日の正午にシリト島のカーニアと申す處に着しました。此の島は古代の神話にヨブの地と云はれた處で、數年前迄土耳其國に管轄され居たるも、全島を擧げて土國に叛き、今では露西亞、英吉利、伊太利、佛蘭西の保護の下に獨立國となつて居りますが、住民の多數は希臘人、次ぎは土耳其、隨分雜多の人間が居ります。

十一日早朝に希臘のピレオ港に着しまして直に彼の哲學史や文明史に名高い雅典へ行きました。同市は人口凡そ二十萬と申しますが、一寸小奇麗な處です。何分時間の少きを爲す頭立の馬車にて名所古蹟を乗り廻り、同地の大學博物館や、同國の國教たる同市最大の正教寺院を訪問しましたが、兩皇の玉座などの備へがあります。羅馬のセントピーターの大寺とは比べものにはなりません。僅か五時間の間に、六十フランの金を使ひ飛ばしました。どうも御承知の通り案内者などは日本も同様ですが、外國人と見れば誤魔化し又口錢を取る、誠に困りものです。

併しながら永年旅から旅と流れ歩き、幾多の人に接し十分經驗の上、人間は薄情のもの、慾の化身と心得て居りますから、何程不人情のことを致されましても、少しも腹も立ちませぬ。却て誤魔化すより誤魔化された方が何處となしに私の品性を證明致すかの如く覺えまして、何時でも私自身に幸福を感じて居ります。私は薄情のことには少しも頓着は致しませぬが、親切にせられたときには一寸したことにも非常に難有感じます。假令世間は何とあらうとも、自分は何處迄も正義廉潔に

他人に出来る丈の親切を盡す様心懸て居ります。

夫れから小亞細亞のスムルナへ渡りました途中一寸不思議に思ひましたのは、米國より伊太利迄の船客は皆伊太利人、伊太利より希臘迄は希臘人ばかり、希臘より土耳其へは土耳其のみでしたが、此の反對で東より西に行きますときは、土耳其よりは希臘人、希臘よりは伊太利人、伊太利よりは米國人ばかりでありました、是れは少々疑問です。いや御蔭にて一寸各國人の性質研究が出来ました。

同地上陸の際は案の如く旅行券を請求しましたから、早速用意の免状を見せますと、身分を問ひますので、英佛兩文で記してある通り僧侶と答へる。相違ないかと念を押しますから、佛敎の僧侶は決して虚言や偽りを言ふものではない

と申しますと、直に許可して呉ました。斯う申しますと諸君の中には、僧籍にも居ない貴様が、現在僧侶などと虚言を云ふて居るぢやないかと思はれる御方もありませうが、四河入海、同一鹹味、四姓出家、皆是釋子と、釋迦も申されまして、厚く三寶に歸依し清淨に梵行を修するものを僧と云ひますので、金襴の袈裟や法衣は纏ひませぬども、身には五戒十善を持ち、一切衆生濟度の外は餘念もなき私、況や四年以前にピルマのタホイ寺に於きまして、釋尊の正統たる南方佛敎然も佛御在世の儀式を履んで得度致しました私、假令日本の戸籍位に何とありましても、僧侶と申して決して自分を欺き他人を欺く譯でもないのです。同地は人口卅萬以上と思はれますが、商業港で何も別には是れと云ふ名所もないのです。人間は希臘人と土耳其人と大抵半分々々位の様に見えます。波止場に

は例の胡麻の蠅がづらと網を張つて居りまして、外國人と見ると案内しやう、いや通辯をと蒼蠅い程やつて参りましたが、もう其の手は食はぬと皆跳ねつけました。彼等は決して學問のある人間ではないのに、何處で習ふたのか佛蘭西、英吉利、獨逸、希臘、土耳其など、五六國の言語を巧に話します。中々日本の中學校で三年や五年勉強しました處で、決して自分免許の英語會話も出来るものでない、實に感心の外はありません。

### 土耳其滞在

翌晚出帆しダーネル海峡を経て、十五日の未明にコンスタンチノープルに着しましたが、上陸は随分やかましい。露國に關係した新聞の切抜や書き物は皆沒收せられました。宿屋は矢張り例に依りロンドンホテルと云ふ上流の所を擇び、露國のバツムへ行く船を待つて居りました。然るに同地は目下非常の混亂で、何程尋ねても行く船がありません。さあ限りある旅金何うやら此處で皆無になりさうぢや、併し幾ら騒いでも焦つても仕方がない。私が少々身分不相應の宿屋に何時でも泊りますのは、第一言語に通ぜぬ不便と、安宿は不用心の上誤魔化され却て實際は高くつくからです。歐洲一圓何れの土地でも佛蘭西語は使用されて居りますが、英語や獨逸語を解する人は極々少數で、所に依り皆無と云ふてもよき位です。コンスタンチノープルでも英語よりは獨逸語を話す人が多い位です。然るに私は英語と獨逸語が少々解ります丈で佛語と來ては皆無なのですから勢ひ英語の通じる宿屋を捜します。上等のホテルには必ず英語の達者な人が雇はれて居りますの

て已むを得ず上宿に泊りますのと、第二には上流の旅館には相應の人が止宿します故に會談の節佛敎の説明が出来まして多少布教になりますのと、第三には私が公使とか學者とか有名の人々を訪問致した折に、宿所を尋ねられたときに差支なきのと、第四に肉食致しませぬ私、下等船客では常に食物の必要があるのと、第五には將に來るべき非常の困難なる行路に對して、漸々背水の陣を布きて進む勘定に當りますから、伏て祈る十方三世の諸佛よ許し給へ讀む人も左のみ谷め給ひを。市は古の東羅馬帝國の首府で、現在八十萬の人口を有し、外觀は實に景色の善きところですが、内部は皇帝陛下の御膝元として、尤も日本の東京も決して奇麗とは云はれませぬが、紐育に居りました私の目には随分汚ない、何うも犬の多いこと、此處は日本の犬殺の様な残酷な商賣をして居る人間はないと見えます。皇居は町外稍淋しい處です。御陵や博物館は古代より近代に至る風俗の生人形として一見するの價値があります。

服装は、男は赤帽、女は覆面して居る外は婦人小兒に至る迄歐羅巴風で、勿論此處も歐羅巴ですが、純粹の土耳其の服を着して居る人間は市中には皆無居りませぬ。土人と云へば少々色の黒い人と思つて居りましたが、實際は外國人の私には孰れが希臘人やら、アルメニア人やら、土耳其人やら、少しも見分がつきませぬ。滞留が長引きました為、種々の研究が出来ましたけれども、餘り専門になりませんから御話は見合しますが宗教が違ひます丈、風俗人情が變りまして面白きこと

が澤山あります。

### 土耳其滞在

土耳其人一般にキスметト即ち宿命説を信じて居ります。随分西洋人は東洋人の信じて居るカルマ即ち因果應報説を此のキスメット同様に誤解して居りますが、佛教のカルマは原因結果の律法を云ひますので、現在の貧富貴賤は皆過去必然の結果として満足致しますも、又此現在が未來の原因となりますのですから、未來に對しては非常の希望を以て奮發勉強する様になります。然るに此のキスメットは純然たる宿命説で振り出されたる賽の目の如く、今世の善惡尊卑は皆生れぬ前に神様の意思に依りて定められてあるので、人間業では何うすることも出来ぬ惡事をするのも神様の帳面にちやんと附けてあるのぢや、苦勞するのも仕方がない、何程勉強しても成る様にしか成らぬと云ふ様な都合で、土耳其國文明の他國に後れて居る原因も、此の信念が餘程關係して居ります。一寸世界三大宗教の信念の相違を云へば、佛教徒は自因自果、耶穌教徒は他因自果、回教教徒は他因他果にあると申しても宜しい位です。

回教國一般の多妻主義は甚だしいもので土耳其も正妻七人迄は公然認められて居るのです。土人中他國人と結婚して居るものありて、其の間に出来し子には、土國の家庭で土國風に育てますから其の性質は純粹の土人です。之に反して米國に於て米國人と白婦人との間の子は勿論、兩親共に日本人で出来ました子でも日本人の性情を持つて居りませぬ。其處で外國人との結婚は宜しく四圍の情況家庭教育國民性涵養等に

十分に意を留めねばなりません。

當市には中村商店として日本人の店が一軒ありますが、日露開戦後日本人の参りましたのは私が始めてださうです。船待ち遠く悒々として居る間に、去る二十一日測らずも男爵末松謙澄文學博士友枝高彦の二氏が塊國維納より來られましたから、翌日は三人打連れて希臘神話に出て居ります神様が手に化して渡つたと云ふボスホラスの海峡に舟遊を致しました。其時男爵詩あり

東西接觸失其宜 天賦形勝氣運移  
牛渡峽頭多感慨 寒湖落日暮秋時

明日は同男と共に式部長の案内にて宮殿及び寶物拜觀するの積りなりしが、只今便船ありとの報を得て出發します。阿富汗斯坦を通行せし人は少く途は尙々遠し

去人爲百歸無十 後者何知前者艱  
路遠碧天唯冷潔 沙河遮日力疲殫

諸君の前には犬の頸輪同前の勳章や人工力が輝いて居りませうも、私の前には如來慈光が常に輝いて居る。(十一月廿二日ヨウスタンチノブルに於て)

### 露國通過

土耳其に滞在一週日餘にして漸く一艘のタンク船を見附出し、其れに便乗することゝ十一月二十二日同地を出帆し再びボスホラスの瀬戸を過ぎて、黒海に入り、二十五日バラムに着きました。同地は何となく物騒ながら先々静かの方で、汽車も運轉し居りましたから、夕方にバク行き途に上りました。此の鐵道線路と並行してバクよりバツムに石油を送る

鐵管が敷設してあります。茲に一寸意外に感じましたのは、平和成立して間もなきに拘らず、私の日本人たることを知り、露國官民共に非常に厚遇して呉れ、チフリ停車場ではジャッパン萬歳など呼びし露西亞人もありました一事です。

バクには二十七日の午後三時に着きました。停車場の外は人夫ばかり旅客だか分りませぬが、露人が一面に地上に臥して居ました。ホテル歐羅巴に投宿致しましたが、此の邊の物價は伊太利や希臘と比較すれば随分高い方です。此處は名高き石油の産地である上に、彼得大帝の時迄は波斯領でありましたので、名高き古代波斯火教徒の寺院もありますし、住人は鞏固人波斯人アルメニア人等、随分雑多の人種が混合し居り、四十二箇の異りたる俗語が通用して居るさうです。當地英語を解する人は至つて少きも、獨逸語は稍廣く行はれて居ります。

郵便電信局員一同が同盟罷工して居る外は先々平穩の方でした、然るに私は首筋に茶碗犬の癪が出来居りしを切開しました爲め頭部一面の繃帯をして市中を歩行致しましたので、何分にも前後三回迄大變な人殺しがありました土地柄、殊に戦争後間もないことで、大に人目を曳きました。

バクの騷擾は他地方の如く革命熱ではなくマホメット教徒と基督教徒との宗教戦争で即ちマホメット教徒たる鞏固人と基督教徒のアルメニア人との喧嘩なのです。當時罷工し居る郵便電信局員の目的も詰り月給の増額を要望するに過ぎないのです。

二十九日午後六時波斯のエンゼリへ向けて出帆しました。此

の裏海には四五百噸位の小蒸氣船が随分澤山浮んで居ります。汽船は皆此の附近の列車同様燃料は石油を使用して居ります。十二月の一日に愈々波斯の土地を踏むことになりました。

### エンゼリよりテヘランに至る旅行

エンゼリの税關にて一寸手荷物の検査を受け、十四クランの入國税を支拂ひまして、旅行券を受け、再び端舟にて湖水を渡り、ハリバサルと云ふ村より徒歩を初め、其の夜はレシエトに投宿しました。

レシエトはマザランタラン州の首府で、人口凡そ四萬程ありまして、現波斯皇帝の第三の皇子アジトサルタン殿下同州の總督として當地に駐屯して居られます。其處で翌朝午前にも謁致しましたが、殿下は年二十三、稍瘠形で小軀の御方です。十五分間程會談して別れましたが、待後の一八正午十二時に小生の旅宿迄訪問するから、其れ迄出發は見合せ呉れとのことでした。が時間に無頓着なるは波斯人の通例で、午後四時迄待ちましても何の消息もありませんので、遂に堪へ兼ね出發致しましたか、此の附近は少々濕氣がある様は思はれました。米の生産地で、可なり耕作されて居ります。コードムと申す所迄は道路平坦ですが、其れよりマンヂリ迄一方は山、一方は川、大變景色の宜しき處です。民家も多く藁家にて日本流の屋根です。是れより以東は樹木なく路傍に民家なく、處々に見ゆる村落は穴居同様の住居のみで、アカベ、迄は絶えず上り坂のみです。

カスピン市街は人口四萬以上と聞きましたか、周囲は高さ三千尺位の土塼を築き上げ、純然たる城廓造りです。元來レン

ネトよりテヘラン迄の道路は、露國政府の手に依りて開かれたる露國の道路でありまして、到る處の要處々々に同國の稅吏が居つて、通行の車馬より通行稅を徵收することになつて居ります。丁度私が同市の東門なる稅關前を通行するとき、稅關吏が私を日本人と認めて無理に呼び入れ、夫婦連れにて茶菓菓子よと言語不通ながら、非常に厚遇して是非一宿して行けとのことですから、急がぬ旅のことにて言はるゝまゝに同家に一夜を送り、翌日二哩許り歩行致しました。然るに前日非常に足を痛めました上、持病の痔疾重くなり、到底歩行に堪へ難き爲通行の荷馬車に乗じて、テヘランに赴くことと致しました。

カスピンよりテヘラン迄の道路は至極平坦で、馬車の通行も頻繁ですが、波斯國の荷物は多く駱駝馬若くは驢馬に依りて運搬せられ、旅客は極貧者に非ざる限りは車馬或は驢馬に乗じて通行致します。其れて私の飛乗りました荷馬車も、矢張り鍋釜器具は勿論食料品薪炭の類迄持參せる一組の旅客が乗込んで居りました。私の通行致した波斯一體にはレシネトとテヘランとに一二軒の外國人持主の旅館があります外は、宿屋と云ふものが無いのです。唯處々に是等の馬や車の休息する爲に設けられたるキヤラバンサライと云ふ建築がある。此馬小屋の一部分に四枚敷位の土間が敷造られてあり、幾許かの止宿料を支拂ひ、其處にて所持の食物を調べ、一夜を過すのが通例です。レシネトよりテヘラン迄凡る二百六十哩、乗用馬車にて僅か二晝夜の道程なるに拘らず、私は大部分歩行致しました爲、十二日を費しまして十四日の早朝にテヘラン

に着しました。

テヘラン

テヘランは波斯國隨一の大都會にして、皇帝御座所の在る所、馬車鐵道も市中を通つて居る。田舎者の或る土人が私に向ひ日本の東京と何れが佳い、亞米利加にも斯んな立派な處があるかと眞面目に問ひましたも理りて、彼等穴居同様な村の外見たることなき土人の目には、無理もない事と思ひました。が併し何程いさ目に見ましても、餘り奇麗とは見えませぬ。目につくものはコンスタンチノブルと同じく小汚き犬許りです。市街はカスピンと同じく城廓造りて、塙の外に一寸堀があります。城内の東部は空地ですが、西部は城外迄人家があります。皇居は中央に位し、土人の市場は南部に、外國人は多くは北部に住居し、露國を除くの外各國公使館は公使館通とも云ふべき一町内に相接して設けられてあります。波斯の官人は英語を解する者殆どなく、佛語は上流社會に相當に使用せられ居れり。テヘラン市には多數のアルメニヤ人居住し居り、彼等の多くは米國宣教師に教育さるる爲、悉く英語を操り、波斯帝國銀行印度歐羅巴電信會社の役員等はアルメニア人多數を占めて居ります。

丁度私が着しました時は、一寸した出來事のありし爲、市中何となく色めいて居りました。其は外の事でもない、從來當地のマホメット教に、血統相續を主張するシア派と、經典相承を主張するソニ派とありて、波斯人一同はシア派に屬し、自らサイエト即ち豫言者の後裔と稱し、青色の鉢巻をして居る者をムラト申し、白若しくは黒の鉢巻をして居る者を僧侶

とし、非常の勢力を有して當に專横なるのみならず、不義不徳の行爲をなし、恬として顧みざる有様なるより、現總理大臣サリタン、アブドル、マデド氏は彼等に對し強硬主義を執り、彼等は之に對し非常に激昂し、連合して皇帝陛下に總理大臣免官を請求すると云ふ始末で政府方も之に對する示威運動として閱兵訓練等種々鎮壓手段を施して居りました。騎兵は流石波斯の花と呼ばれる丈、悉く露國士官に依りて訓練され、服裝迄露國コサク兵と少しも變りませぬが、歩兵に至りては人夫と云ふよりは寧ろ乞食と云ふ方適當にして、斯る兵士が戦ふことが出来るかと思ひました。

私の來着以前より日本の佛僧が來市するとの風評がありましたので、私が着せし翌日、波斯皇帝御雇陸軍教官露國陸軍大佐テルノゾボフ氏より醫藥旅費其の他必要品あれば遠慮なく申越され度し力の及ぶ限り扶助すべしとの趣をイスカンダバン將軍を通じて申込まれました。私は當時別に其の必要を感じなかつたも其の厚意を謝せん爲、將軍同道テ氏の官邸に赴きしに、非常に懇切に待遇せられ、旅宿を引拂ひ自邸に引移り、兩三日滞在せられよ、皇帝に謁見を執り計ふべし、自己の訓練せしコサク兵を閲せよなど、所望されしも固辭し、會食後旅宿に引籠ました。が出發の際は、テ氏より城外迄案内として二名の兵士を附せられました。(次號完結)

BROTHERS AND SISTERS:

The World-Honored One, the Buddha, our Master and Teacher solemnly commanded us, humble disciples, to all sentient beings of this world the truth which is without parallel and most veritable, and which was discovered by our Enlightened One himself after a long period of speculation and penance. In compliance with this command, therefore, our faithful fellow-believers of the Buddha have travelled all over the world to release the people from the yoke of ignorance and to embrace them in the rays of enlightenment. In order that we, humble followers of the Buddha, who are living in the United States of America, might also in accordance with the holy instructions of our Lord, propagate the essential principles of Buddhism among our American and lead them to the path of Buddhawisdom and enlightenment and finally arrive at the blissful garden of Nirvana, we have organized a Society known as The Buddhist Association of America.

O, Brothers and Sisters, who are led by the Buddha's gracious hand of guidance, awake and listen to the great doctrine of enlightenment which resounds all over the world! Now is the time to proclaim the holy teaching of deliverance with heart and soul to our fellowbeings in America! The message is grand, but its execution is beset with difficulties. In order that this union might successfully realize its holy objects and propagate the doctrine so anapiciously transmitted to us, Brothers and Sisters, come and work with us!

Yours fraternally,

Secretary, THE BUDDHIST

ASSOCIATION OF AMERICA.

嘆

咏

かくれが

甲  
之

思へば遠し來し方の  
 路の八十くま河のよど  
 目に見ゆ思ひ。白雲の  
 八重立つ山をかへり見る  
 眞盡しづけき山の上。  
 光あまねく咲く小百合  
 み空も低き思ひかな。  
 みちなき路をたどりつゝ  
 木立繁なる方にこそ  
 心自づと引かるゝよ。  
 狭まる心は目の前の  
 草の葉末の露すらも

あはれと見らる。悲しけど  
 盡きせぬものは光かな。  
 向ひの山の尾をわたり  
 雲かたなびく、紫の  
 あやめ草かもひた咲くは。  
 花つくるころ湛ふる湖  
 ひた照る天つ日今斜め  
 日の足けぶる水の面  
 煙かも立つ民の家の。  
 かへり見る右深き谷  
 冷たき風にゆる松羅  
 岩立つ松よ千ひろ垂る。  
 蘭の花さく水のくま  
 しぶきは氷る花の蕊。  
 笹の葉末に起る雲  
 空のみどりの深さかな。

八重引く雲の消ゆるところ  
 里の森見ゆおぼろかだ。  
 思ひぞ起す、吹く風に  
 散る花土に踏みつゝも  
 水の流れにゆる心  
 涸れし想ひに再びの  
 光をとます春の宵。  
 千瀧たぎちて岩ゆすり  
 南走りて行く水を  
 たづねてのぞむ北の山。  
 白雲深き峯の八尾  
 空たなはるけだかさよ。  
 心消ゆがに極みなさ  
 力覺ゆれ身にしてみて。  
 ひまを求むる光かも  
 障りに折るゝたびたび  
 かすかに消ゆるたちまちに

眠りに落つる間もあらず  
 醒むる再び、めぐる血に  
 吾の力を吾に覺ゆ  
 あゝ苦は盡きず湧く。  
 ゆらぐ心をしづめかね  
 さ迷ふちまた、月曇り  
 雨こそそそげ、ああ  
 路もなきかな、疲るゝ足  
 行くともなしに人の世を  
 さかりたどりて山の上  
 千年の木々の繁るかけ。  
 晴れみくもりみ定まらぬ  
 人の心はとこしへに  
 曇りてあらむ。しかれども  
 吾身をあくに所なく  
 闇にさ迷ふ雲のうち  
 光ぞ見ゆる。けぬる思

かすかひびくは佛のみ名。

心をこぞり目に見ゆかけ

耳さくひびき胸内に

ことごと吾にかなふかな。

罪をあはれとしろしめす――

あらずあらず、あはれよと

罪も見とめぬ――深き慈悲

何のゆかりぞ吾はかふぶる。

ややに傾く日の光

向ひの谷に起る風。

千重のしき波ゆる光

谷に尾の上のみなぎれば

自から咲く草の花。

青葉みさかり降る甘露

稻田の上に夕立す。

天地うるほふ忽ちに

風は激しく雨を吹き

空を洗ひて今晴る。

目に見るものは濃きみどり。

まなこすがしも、ああ

盡さぬ光のみなもとを

人の心にはからむや

人

目

見

空

風

雨

空

燃

山

堪

へ

て

笑

め

る

み

つ

う

み

つ

ら

し

も

と

な

り

て

住

ま

ば

大

洋

然

ら

ず

は

人

の

得

知

ら

ぬ

山

中

の

海

湖

の

水

の

落

ち

ゆ

く

川

の

川

下

ゆ

の

ほ

り

来

れ

る

魚

あ

る

ら

む

か

湖

の

水

の

落

ち

ゆ

く

川

の

川

の

邊

に

小

牛

草

食

む

春

を

し

ぞ

思

ふ

そ

を

立

て

る

峯

を

離

れ

つ

湖

の

面

に

更

け

て

動

か

ぬ

片

破

の

月

詩

甲之

ほとけの慈悲はたゞ心に

しみじみいたたくのみなれば

言に出して言ふを得ず。

人の言にいふべくば

み慈悲のかけをおぼろかに

とどむる人の行ひに

たかき御國に行くゆかり

せめてもねがふのみならむ。

佛の慈悲はちのづから

加はるものぞ、しかれども

そをさとれよとみち引かす

よき人なくばとこしへに

かふぶる光知らずあらむ。

あかめまつらむよき人を。

湖

八風

空燒かむ焰噴きつゝ怒りけむ山に堪へて笑めるみ

つうみ

さゞ波に山影ゆるゝ湖にしも大きな力のひそむとを

知る

岸に生ふる草の葉末ゆ一半湖に落ちたる露思ひみ

よ

み佛の出てます待つと蛇になりて聖ひそます湖も

ありとや

魚となりて住まば大洋然らずは人の得知らぬ山中

の海

湖の水の落ちゆく川の川下ゆのほり來れる魚ある

らむか

湖の水の落ちゆく川の川の邊に小牛草食む春をし

ぞ思ふ

そを立てる峯を離れつ湖の面に更けて動かぬ片破

の月

A lily of a day,  
Is fairer far in May,  
Although it fall and die that night,  
It was the plant and flower of light.  
In small proportions we just beauties see,  
And in short measure life may perfect be.

訂正前號「暮れ行く日」中  
「見るやらず」は「見るさざらせ」  
「空立の木々」は「空立つ木々」  
「廣なる輪波」は「廣なる輪波」  
「波の穂に浮く」は「波の穂に浮く」  
「心滿つゝ」は「心滿つゝ」の誤

## 時報

## 傳道紀行

一年容易に夏季修養の時節とはなりぬ、各地より懇に招かるゝまに、自ら企てずして傳道せしめたまふこと全く佛天の御はからひと感謝し奉るの外なき也、さればありのまゝに、其道行を記して喜びの心を描かんかな。

六月二十五日朝最大急行の列車にて東京を出立してゆく、されど流車の速かなるため窓外の新緑を闊却し去りて午後六時米原に着す、乃ち兩三日

## 歸省

せんとて汽車に乗り換へ、虎姫驛に着せし頃は夜既に暗くなりて、風雨霏々として何となく物淋し、車を雇ひて田舎道を辿りゆけば幾千百となく飛び碎けて時ならぬ星の俄かに落ち来るが如し、速水驛より一帯の清流に沿ふて下る道すがら紛々として亂れ、螢々として閃き、忽ち來りて目を掠め、忽ち車夫の笠に止り、戯るが如く、迎ふるが如く、田園燦として恰も銀河を漕ぎ下るが如き感を起さしむ、海老江村に至りて車を下り徒歩小路を辿り、車夫荷を肩にして夜十時歸宅す、父上の墓前に禮拜讀經して家に入る、母上大に待ちて喜びたまひ、又伯母上も來り迎へたまふ、入浴して母の上新に手づから織りたまへる單衣を頂きて慈恩限りなく身に侵むを覺ゆ、我は齎せる土産を陳べて母上を喜ばせ奉る、菓子も父

上の生前好ませたまへばとて、直ちに佛前に供へ、團欒して晚餐を喫し、談笑夜半に到り、東京の事など、色々語り出て盡くるを知らず、いつもの如く打揃ひて五尊を拜して寢につく、嗚呼人は如何に老ゆるも故郷に歸れば小供となるものなり、

かくの如く晝も夜もいと安らかに語りくらし、母上の作りたまはる小供の時より味ひ慣れたる團子など味ひつ、隣人及び信徒門徒など、共に法を喜ぶ、恰も廿七、八、の聖日に當りたれば慇に勤行して説教をなす、兩三日夢の如くに過ぎ去りて二十八日午後別れを惜みて出立し虎姫驛に乘車して小川郡長及び長濱青年會の杉本吉之輔氏に邂逅して、奇遇を喜び、夕方同じく江州の八幡驛にて下車して

## 馬淵驛

を訪はんとて行く、こは東京出立の前數日馬淵の人、牧田孫右衛門氏多年人生のため色々と苦しみたまひて或は多賀明神に詣り、叡山に百度詣をなし、元三大師に祈り、其他さまざまの修養を経たる後遂に絶對の慈悲を喜びたまひて直ちに東上して予に其告白を示したまへり、げに稀有なる出來事にてありし、その時予はかねて江州の馬淵は住蓮房の死刑に少せられしところなることをき、しかばその遺跡を尋ねて詳しく承りしかば、こはよき御縁なり、住蓮房の墓に詣づべき時節の到來せしならめと何となく慕はしく思はるゝまゝに遂にかく立寄ること、はなりぬ

中仙道の低き小なる松の並木ある街道の、馬淵の驛に入る前方にて右の方に少しく荒蕪せる土地ありて清水の湧き出つ

## 二教友

來り會す、其一是雜錄欄に掲ぐる鈴木佛君の消息にして其一是昨年暑中態々求道のために上京したまへる城榮太郎君自身也、君は予の當地を過ぐるを待受けて同乗して神戸まで送りたまへり、君は温情濃かなるの人、嘗て岡山高等學校に學びて深く佛教に志し、殊に同地に佛教を信するもの少きを憂ひて昨年已來予に同地に傳道せんことを望まると頗る切なり、今や正に其機の到れるを以て打合せをなさんが爲也、談笑互に東西兩京の教況を語る、乍にして神戸に着す、共に楠公社に詣り袂を分ちて獨り西に向ふ、須臾に到れば窓外

## 白沙青松

恰も晝くが如し、嗚呼是れ十五年前予等學窓にありし時第一回佛教青年夏期講習會を開きし所、彼の山、此の水、皆當年の記憶を止めざるはなし、而して建築物は新にして高壯を加へ當年の面目を存せず、茅屋軒を並べ、竹籬塵を避けし質素なる風景亦見るべからず、明石の風雅、舞子の清婉實に言語の描く所にあらず、況んや淡路島の青巒笑ふて迎ふるが如く呼べは將に應へんとするの趣あるに於てをや流車の姫路驛に達する頃より夏熱燦くが如く坐に堪ゆべからず、岡山に到る頃は全身疲勞を覺へて自ら其何の故たるかを知る能はず、或は岡山の故舊に一泊せんかと考へつゝあるの間忽ち連絡汽船出帆の聲に促されて、倉皇として京橋に到り、乗船す、船河口を離れ、岡山半島に沿ひ、島嶼を縫ひつゝ後に中國の連山を望み、前に四國の青山を眺め遂に船は高松港に着せり、城樓高く海上に聳て老松數百枝を交へて趣を爲す、其景幽

る處あり、これ住蓮房の刑せられし處なりと傳ふ、口碑の傳ふる所によるに住蓮房若し京都に至りなば命を請ふの人ありしかば路にて斬りしなりと、而して安樂房は六條蹟に斬られしなりと、いづれにしても皆歎異鈔の奥書に書き列べられたる念佛停止の難に殉じたまひし人々にして、我人の容易に唱へつゝある一遍の念佛も此の如き殉教の血滲なるを思へはいと貴し街道の反對の側に數町を隔て、田の中に松林あり、中に住蓮安樂の墓二基あり、田畦を辿りて之に詣り、墓は五輪形にして元祿年中に建る所なりといふ、予恭しく墓前に讀經禮拜して、當年の光景を追想して、森嚴樓館の感に堪へざるものあり、地字の名を千僧供といふ、往昔千僧を供養せし所なりといふ、嗚呼往昔僧を供養せし所に亦僧を斬る、而して之か爲に法力益々顯る、吾人古聖賢に對して慚愧措くべからざるものあり、予昨年以來殊に死刑囚の爲に教誨するに至り、住蓮安樂の殉教を憶ふこと頗る切なり、今や墓前に詣りて低徊去るあたはざるものあり、土人傳へ言ふ墓畔の松林及び並木の松樹皆延びず、樹心立たざる所以のもの皆當年の悲哀を遺す也と、果して言の如し、吊し終りて馬淵驛に至り牧田氏を訪ふ、氏未だ京より歸らず、母氏と令息とに見えて辭し去る、後に氏歸郷の後予に遇はざりしを惜みて懇情溢るゝものありし、八幡停車場畔の旅亭に泊す、安土の城跡、八幡の城山等十里一目眼前に溱る、枯坐獨想燈を剔て感を記し同心の人告ぐ

翌三十日未明八幡驛を出立して直行西に向ふ、大阪驛を過ぐるの時



前號要目

求道

- 德號の慈父、光明の悲母
- 招喚の勅命

感謝

- 瓦礫金と縲ず
- 歸依佛
- 息災延命
- 降魔驅鬼
- 心光攝護

講話

- 罪惡觀の心相

近角 常觀

聖傳

- デヤータカ釋尊傳——成道

告白

- 佛陀廣大の慈悲

講義

- 歎異鈔——第一章

嘆咏

- 讚唱歌《短歌》

- いななき《同上》

- 暮れ行く日《長詩》

紹介

- 十萬白龍
- 眞宗假名聖教
- 眞宗寶典
- 眞宗聖訓
- 親鸞聖人全集
- 新約物語
- 宇宙の默示
- 法句經等

時報

- 求道學會紀念日
- 島田蕃根翁延壽會
- 講話題等

忠作次

近角 常觀

左千夫

八風

甲之